# 寛政録

十二

昭和五年十二月上院起草

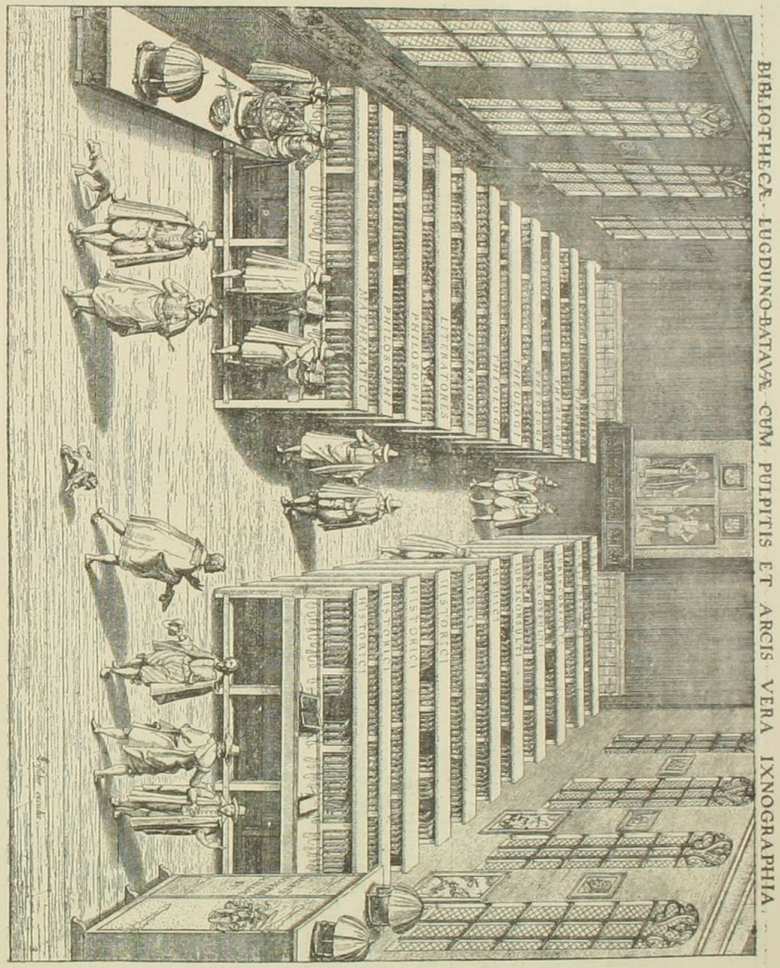
特別
14
1919
429

176694

# 寛政録 十二

昭和五年十二月上浣起草

○奇月あるが如(長崎奉行)唐人、唐船の国を以て孫ら
しく思くしかいある人の話しを以て長崎唐船の国の国も
あるなるべしと思ふ故に唐人の国を見
得ざる大いさ唐人屋敷の国を同しく故本も同しく長
崎縣山河二中略唐文流右之門ろう、北の先生唐船
の国の郎ち出島の国ろう、北の一部の解説なり
出島婚之儀ハ寛永十三丙子年長崎御奉行の
榊原式部少輔殿三中略御在勤之節南蛮人逃所唐こ
長崎俄御傳上出島を所人廿五人二筆主被仰




38- 9215

家茂代年仕奉者人病を仰付子丑寅三ヶ年
出府を寄度仕和年日本國海御停止知
辰五年出府出地
尚は他の一隅の解禁を願ひ
寛永十八年巳年長崎御奉行(三ヶ所 相模 相模平右ヱ門 相模)
市左衛門奉行人平戸より御移し出島へ御入
れ之を家賃沿革
阿蘭陀人より年々一ヶ年銀五十五貫目に御拵
永九庚子年迄百四十五年に成る
と雖も之に就て出島の起原阿蘭陀人の北島に
移り以来、所人が北島を築立ることが分りたる
北の図板の通りなるも安永九年なることが推測し

模原製

得べし、北の図中七番橋より中央に大通路あり
北の北端に出島と引出す図あ
り、蘭人丈に敷る図あり(是築地の為なり)
和蘭、池あり花畑あり
と雖も、冬枯の様上に(如)ぬ也、すべて書割のかき
方の度人形の図に同じ
○横井也茂の日高と句を詠り多一幅を賜ふ
月に小角を横き
句ハ
芋ばかり名ハ小角豆なり
千代庵
茂歌と云

予うめ氏の事すきび求め侍し
かさ形て印をかゝ
七十八翁蘆隠□

半掃庵の印文等外に隠里の印もあり
のちあり雪天燈を排して無聊と国文故を検し
特に政治に関する法度の文を一冊子に抜き出
又、其の冊に書しる所の政治志料と云へる北内
の修史局等三海あり高橋文淵の著書を
命じて欽米に赴くを送る序文の稿あ
り、大津湖南書件と谷干城沖江四方藤(ヨシ)
雲形山口甚七等文世(ヨシ)種等が政府に対
問書を奉る際の答辞あり云へる其の稿本

榛原製

こゝに於て、細鮮の交に就て公使花房氏が天
皇に呈し侍る覆見一則と云へる自筆の意見書
あり、大隈侯の條約改正の折衝の変を示す時
の所作なり、余も書を天皇文雄閣下に奉る
書七通(数通)の草稿あり、高橋泰邦に政治
文物等を問ふ、追て綴り合せ一冊をなす
べし、此の反故は拙庵に値す、教授を防かざるの
らず

十二月二日記

追記　上野公園内に病院を設置せんとすることを不可と
する意見書(公文書)東叡山増上寺に洋人を
入れ付書、前沢男爵自筆、京都を東京に移す
べしとする意見書の如きも北冊子に入るべし

○余学ぶこと久しく印譜を蒐め和漢著名の印書数種
拙稿に、新書を支那の新説出づるも今い未許も存せ
ず、唯此皇朝古銅印譜の如き存す、其目左のごし

埋庵財寶秀
令獅重史 二冊
寶印集 三冊
皇朝古印譜
自修日本古印譜 五冊
日本古印譜 一卷
古鑄百印 平瀬氏蒐印
家藏印譜 古銅印譜
自修日本古銅印譜 一帙

模原製

集古十種 印之部 家大人影寫

博 堂古印譜

僅かに北等数の文字なれども、日本古印の存する事実に多
からず、恐らく北等の印冊の内に大概包羅したる歟
と、余印冊を得て直に之を編輯し今冊に載せす
此頃も神田春平所蔵の交故中より三四十の印冊を
得て帖と為り之を一印譜と得り、目次中自修日
本古銅印譜と為す、是れ也、他の印譜に数多
若干重複するものあるも、蒐集のこと為り
補い得ざるも少からずと云へ
○素園石譜は玩石家の孫とする所也、此刻本極
めて少なく、写本も稀なれど其価甚

北貴し、曩に大村書庫図を書刻する時、此書を再覆刻し、再来流布するに到れり、人多く我邦に覆刻本あるいを之れを始とするかの如し、何ぞ図元、吉崖の前に之れを覆刻せざるべんと云ふ、多分と推測に強き、亦た推量に過ぎず、亦た推量に過ぎず、刻本まず図元講のあるを見るに、一数を喫したり、書庫を人をして市場を得せしめ、初めて見る所のものなりと、試みに吉崖本と比較するに、異同多からず、図元本異なり、彼れと生つれば図は素人の手なる為なるべし、山の家の手なる成るべし如きあり、彼れを生つれば解説の正確なるべし、北石講

複原製

に二本ある歟、北本いつの比誰れに刻されたるや、本二巻の首頁、皆間に加物蒙心多校行とあり、北僧西五支那と海ひ文なるべし、しかるに、人うれば北者の刊も古いものあることを知るべし、雖比行故に北本流布せざるや、恐らく東吉崖の如きものあらざるや、恐らく失せるものもあるべし、版木早く焼け、吉崖本に比すれば頗る孫本に属すと云ふ、本一巻首部に二ケ所錯簡あり、但し幸に脱紙なし、

十二月三日記

○貝の生吹蛾数デバケーションに就て文を日本国書俗絵の載せし時、デバケーションの種々の体合を例に挙げたれば、乗の つかきかつ比一例がある、脚本

書いたことをきいた女の例もある。

○理髪師のかたわら紅白繃帯の棒のぶきこまれを抜歯

とも言ふが元来は外科醫を兼ねた頃のことを語る

ものであるが、普通には外科医師とするべきはずの先が理

髪師とするべきはずの時代があつて、解剖の為

死体を得ることが絶対困難であつて、それを得るのに苦

労が絶えず刑場を外科医が出入りして開業をやつて

云ふ仕末であるから、保土塚口長城（九萬一）の遊歩

地獄を渡んで見ると、巴里文学の黄昏時代の流

の内に死ると成人で面白い味ある記事がある

前号）女内かも特に医科大学の生の解

剖をいふ人、実に真面目で且つ真剣

びあつれ、彼ポハ多の研究材料を手に入れる
ことをいとく苦心し、ものであつた。先生から
解剖の講義を受かうとするものどうしも
も死体が必要になつてゐる。ところが当の南
時は人間の死体を得ることが非常に難
かしかつた。何故なら支那人は死つて一
同じ神経の部厳な信者がこんな目をつ
けて、死んだことが確められると、直ぐそ
の屍体を焼き捨てやうと目を
付けてゐた。それから醫学生はセーヌ又
河に流れてゐるのを拾へるか、又は町の陰く
暗で未だかさもるものを拾つて来るのを

標原製

刑場の首切人に頼んでおいて、彼首台から
直ぐ来て貰つて学ぶ。ものも他の結局かまの
つれてゐる。学生が一番多く実習したの
は後藤新平君のところへ行つて頼み込む
のであつた。ところがここで又新参者の制
約が起つた。それは医科大学の学生とセンエーヌの外科の生徒との
競争もあつたこの時分は外科医
になる為には前科の理髪師の外
ならぬ心ちがつた。古い間理髪師の外
科手術をせる特権を持つてゐたのである。
彼等はナイフを使つて足をゆつくり切り

鍼や灸を制つ事、古い歴史を有してゐる。外科医といふものは理髪師の時代に人がやつたものであつた。しかしやがて外科医は理髪師を馬鹿にし出して、理髪師から分離することを望んだ。理髪師の方でいやだが矢張従前の道を歩むやうに主張した。そこで主教が勅宣を下して理髪師を以下のやうな権利を許した。髪を結ぶこと、健康な男女に第一の浴場及び蒸風呂を供給すること、その他瘰癧、癮、癢、膿傷の重態ひとへにこれは、理髪師が浴場をやつてもよいといふことである。

榛原製

また外科的手術をすることは特別免状を持つてゐる者でなければ外科医は古い手術着を着て病人だけを治療することを許した。但しこの免状持つた医師を置くこと。

ところがその後、分れたのが又一つ出てきたのだ。それも外科理髪師といふのがあつてこれは二流の医師の資格を有する者で、実地試験を通らなければならぬ。

また新しい制のもとで顧みを出さなければ

制することゝ、外科用ナイフを完全に作り上げることであつた。しかし此時まゝでは、外科医手術と現製品のあと離れて来た。且つ試驗に成功することゝ、医科大学の二人のドクトンとシヤトレーの二人の外醫の面前に於て外科を開業するまでの苦心は筆舌に尽くされない。

兎に角外科医委託製品は医科大学の学生と同じく解剖する死骸がなかつた。何故なら彼方の御免の類はあつたけれ、ナイフや剃刀を十分使ひこなすことの練習が出来ないつたからである。で、裁判官が死刑執行を宣告するや否や、医科大学の生と外科医師は製品のとの為方が異なる死体の極奪隊を仕組んだ。銘々が梯子や特縄を用意して負のつて、銘々が梯子あつた。それ出かけるといふ軒を伝はれば出かけるといふ仕合。其の上つて、柱から柱へ曝された死体を外つすのだつた。……屋敷の西方の原奪隊が出かけて集まることがあつて、さうすると、きまつて大騒擾が起きて、漸やく死体の一切の完と各自に持つて行つたが、大抵の場合外科医の方が勝を制した。

極奪の競爭ありて生存の權利を
大いに解釋試驗中、紀髮の如き其婚姻に
外ならざるの情あり、其婚姻に
入前の事なりしとのこと、後世千五百年
とのべ

○村山秋浦氏の姪帶の狩谷棭齋翁の
三字額を示さる、文三云風詞堂後額に棭齋
印之とあり、マリリエの姪集を帶べ
ども稱らしきもの也、棭齋は各体の書を能くし
ルと狩野額をを新して書かさりしと云く係
類の、動もすんべあるものの其の娘の代筆と云
いふもあるも此の額面の筆も亦もと彼の家

蔡の筆の論者と稱するも、特別の關係ある者
き無つくるものの、蔡氏娘の代筆とも
思へんず、風詞堂の號もよし、乃ち娘の入る、
余棭齋を好む、家蔡と其遺印二顆あり
而して遺墨は一も有せさるを、惜三十五

十二月六日記

○○外國の文章家に達筆の人もあり達筆の人もある
伊太利西班牙ではアナトール、フランスは
達筆にて、文章を錄つ錄つ人なりと云はれてゐる、
堀口氏は佛國にあれ頃若きころの此人三六人ハヘれ
と云ふてゐる、隨筆潮心録するフランスの記事が
其錄り方をかりのまゝに書いたるが得意なり

みつ、えんこ撥ると、無和のナンデも捕へず走り去る。
笑を印刷に回はし、校正掛りが来ると、先づ第一回の
業を加くる二校三校から七校八校迄、及ぶ。
句を直すことを文章の骨折りだと云ふ。
る、或は重複語を整理する、或は形容詞を工夫
の苦心する、校正毎に著作の如く云ふも順序がある
さして校正の六回目に到つて、削る一方で元かゝる、こん
な句会を作ることを思ひ付いたのだと云ふてゐる
るが、真に印刷所迄もである。後ん自身云ふのうい
俺んろいインスピレーションといふ所つて来る
い、俺んろい意味が欠けてゐる、もあし思耐力が強
よい、僕い実際やつとこさで書くのだ、御ろれよつち

りくと歩いてゐるだけと自分でもゐると考へんも
ある。ある人が一寸く嗤み出すやうな書いたのも
笑ひ、北五浩がある記。
の外回文豪の凝りの凝ることい秋京であつて近中の俳
設の人物の名をもつんりもよさそうなことが言ふ
るも和尚の名を授かすることろくの苦心をやる、バル
ザックが心為中の靴屋の名を撰ぶに、市中を歩
き回つて、ある靴屋の看板を見てやつと言葉の名
を得たのだ、小躍りしてよろんだことや、モリエールが其
心想傷病の中で薩勝の役を勤める男の名を
しい名を探してゐる時偶然市中で美薬屋の手
代を出来つて、其名いかと尋へたら、フルーランと答

へたのが嘉永の頃で其年代を推察されし、
後この作が評判するとともに共に年代まれが若き
くるつて、その思い出の為めに無用する愛業
信とともに忘れるべき珍談もあり、

○仏国あたりで流行小説の変人方などい実に強烈の
ものもあり、ゾラの「ナナ」が明治廿年頃時堀
口夫婦を下宿仏蘭西に居つて、其の変出しの光景
の前を通ると、何百の群衆が列をなすあり、彼
をつくと、「ナナ」の変出しと云ふ事に堀口夫列に加
いつて待つ間を追々群衆が多くなる、早く変
ぬくと催促する一斉に律儀に「ナナ」を食喰す
るの如、庶民が高彩に三十人計り待て居り変り出すと

榛原製

云ふて、見物お退屈であらうと云ふて、庶民らしいあ
が一枚の板に掛りを記せし位の、中坊のもあつた
のも面白かつたと云ふ、其光景が某座が「アナウンサー」
として在る各方のうあつたと云ふ、ある時刻から
変出しを深更に及び一日五番都と変切つたと云
ふ、さて変の数から、洗髪どこもかすり」の流
しも多くなり、堀口は一流の角と全都通流したと云
ふもある、此者は此年で二百六十七歩とうつて居る。ジ
ヤン、ジヤックリ、ルソーの小説が売り出された時も
まだ珍らしい事柄で奪つがめく買つて行き、会ふ人
達人も徹底した言いれ位で出し抜けに「お嬢さ
んとうつまり此か」はい嬢さ

（明治廿五年三月廿五日第三種郵便物認可）　昭和五年十二月五日

夕刊

# 北越新報

No. 1

## 春城漫談

市島春城

### 筆者自から

自分は近年七八年續いて毎年夏季、暇を得るにまかせてむだ書きをする。その結果、一年間に一人に關する件、六、看守人に關する件、七、特設雜貨店その他に關する件、八、參加團体事務所に關する件、九、商業取引相談所に關する件、十、その他の諸事項について各自忌憚なき意見を交換協議し更に岐阜市及び松本市から特に提出した協議題についてもそれぞれ協議研究するところあり午後三時頃漸く終りそれより出席者一同いたもの、昨今書いたものそれについて調べてみると、ほとんど全く忘れてゐるやうなものが、少なくなく、それがまたポツ〳〵と出て來る。中には鶏肋の情に堪へないやうなものないでもない。二三十年前のものになると、他人の筆録を見るの感のされるものもある。それを次第に繰つて行く事は如何に捉き邊りでは歳末に際し東京府市の極貧者約一萬に御救恤金を賜ひ更に東京府市の失業救濟事業に對して年内に多額の補助金を賜ふことになつたことは既報の如くであるがなほこの外に囚事業その他社會事業團体に對し優秀な成績を擧げつゝあるもの約二十二團体に事業御奬勵の思召を以て奬勵金を御下賜相成る旨五日御沙汰あつたので一水宮相は聖旨を奉し夫々傳達の手續を執る筈

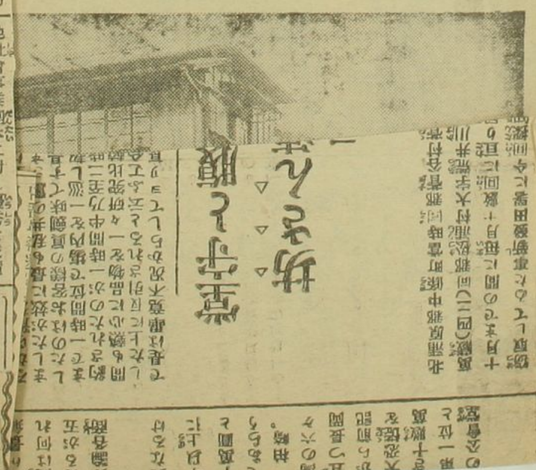
## 上越線全通記念博出品打合會出席者

（公會堂にて）

東京市、秋田市、宇都宮市、郡山市、岡山市、大阪市、神奈川縣、名古屋市、前橋市、群馬縣高崎商工會議所、高崎市、廣島市、靜岡市

會の代表者約四十名にして縣からは博覽會の顧問物産紹介所長小沼直氏を始めとして數名、又地元長岡市からは會長木村市長、副會長田村市會議長、副會長總務部長

## 新報



北蒲原郡中條町當時同郡黒鶴村大字荒澤浦村十月末その間に郡役所、郡會、町村會議員の公舞臺

## 空中飛行

△△△

十二月五日

東京市麹町區上之坂町二番地
新潟市東堀前通七番町
佐藤留吉郎
長岡市大字坂之上字西國
新報社

(明治五十三年三月廿五日第三種郵便物認可)　昭和五年十二月六日

夕刊
# 北越新報
十二月五日
長岡市上之坂町二丁目
北越新報社

No. 1

## 春城漫談

### 筆者自から

市島春城

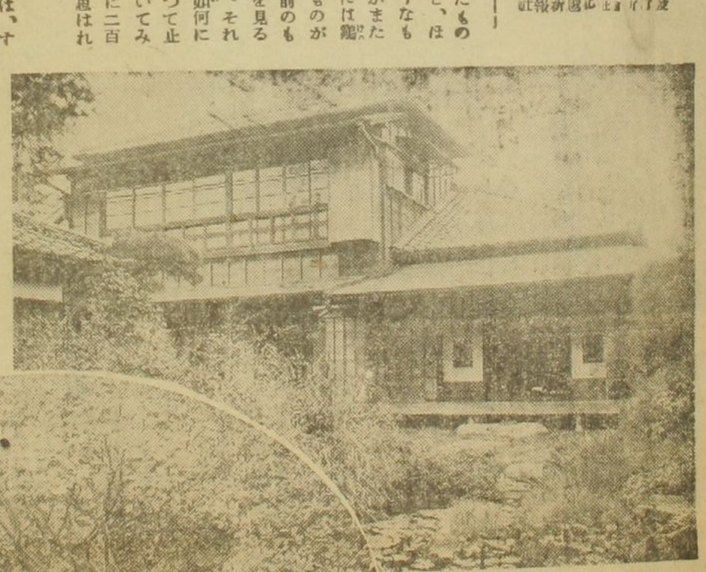
自分は近年七八年續いて毎年夏季、暇を得るにまかせてむだ書きをする。その結果、一年一回隨筆物を出版して世に問ふ、それが年々の例になつてゐたところが本年は少々、事情があつて夏の繁忙盛りを別な事で送りためになに、隨筆を出す事が出來なかつた。しかし毎日〳〵見た事、聞いた事、或は感じた事を暇にまかせて書き殘して置く習慣は依然例の例。一年立つてみると相當に書き溜かを見てゐるのも相變らずだ。

○

たま〳〵廣井社長が見えられて新聞社のために、隨筆を連載してくれないかとの話があつた。が、新聞なんぞに書くやうな心持ちで毎日〳〵、書いて置いたわけでもないから果して、役立つやとうかに疑問ない氣もしたく書いたもの、昨今書いたものそれについて調べてみると、ほとんど全く忘れてゐるやうなものが、少なくなく、それがまたポツ〳〵と出て來る。中には勉助の情に堪へないやうなものがないでもない。二三十年前のものになると、他人の筆錄を見るの感のされるものもある。それを次第に纏つて行く事は如何にも面倒で、時には管を拋つて止む事もあつたが、思ひ拔いてみれば、この前の時のやうに二百回位は續け得やう、とも思はれた。

○

この前二百回を續けた時は、すべて趣味問題に限つたやうであつた。こんどは歷史を廣く、趣味、文藝、社會加へるがそれ以外、或は政治に、或は社會問題といつたぐあいに多角性を持たせて、見た事、聞いた事感じた事を錄、書いてみやうとも思つてゐる。中には雜物を讀んでそれを拔き書きしてゐるのもあらうし、或は本の事を要略して書いたのなども、いくらかはある。何分古くから書いてゐるのでその事項、は二三百を數しやう。そしてそれがまた何本から抄錄した、と書いてあつたり、なかつたりするので一々雜名を擧げる事の出來ないのを遺憾とする。かつ文章の如きもこれとて世に公刊しやうとして書いてあるのでなく、只自分だけにわかればいゝ、としての書きつ振りであるので、潤飾もなにもない。實は書き直さう、かとも思つたが二百回餘をも續けやうとするものを、毎日〳〵書き直して行く、自分にはそんな暇を持たない。雜筆的に、書いて置いたそれをそのまゝ出すより他に、什樣がなく如何にも章句の疎漫なのを恥づる。が、この點讀者の寛恕を乞ひねばならぬ。（寫眞は、春城先生お宅應接の間と廊の情え込み）



故なかれハ将来を案じ主人の命名を附し幹事らに定めんとの意あり、余に命名を撰べとの嘱あり、余は時と徳志會と呼ぶがよからんと答ず、徳志の二字は昔し内裏鐘山が宗家の名称に於ける国字天朝山と唱ふる舊邸を命じたる名なり徳志園の記は余自筆にて其年石に刻し北の後園の立碑に附て有り、北の白城の如き丘陵状の築宅へ書し銭鐘の嵐に六郎氏故址の為め染き呈するものなりと云ふ家を造るハ其人の業なり父祖の志を徳くことなるを由て北国名あり、今の主人が或の墓を興し或ハ資を育英に投ずるの如き皆先考の為し給ふことの偶ふこと多

横原製

れハ其事を離れ難ハ因縁ある命名を徳志の名を採ることなれも然るべしとして既に存り今日を待つ名なれ他に如何なる名なりとも之れを及ハさるべしと云へく、命名も皆なるべきの極美しと云ふ日を終に命名とす

十二月十日記

○教化運動の将来ハ決して楽観を許さゝるハ状況なるの上に各大の学に新らしき争擾ハ皆教化の因を為すものなり。学校に求むる所も皆其擾を一掃せんとする。役等本庶の漸やく運動方針に考ふる所あり、こんらんハ工場なるを主として婚動しなり工場を驚かせる結果

は徒らに失業者を増すの結果を生ずることなきを
いうことを云て取つて、今い方向を変換して。
学生は父兄らに学資を乞ひて学つきし失
業の苦をひかるべし。彼等が方向を誤る所以
である。彼等は必ずしも共の要求の容れらる
ことを望まず。或る程度まで
驚きをつけんが為に表化の武装の目的を達す
ると云ふ見地から考へすぎるのであつて、要求の容れ
られないことのないん切つてみるのに驚くのも
莫迦げたことの八幡の実力をかくすべからざる
あつて、驚くに値しない武装無化の目的成者が生
ずるが学生が驚く目的と考へられるもの

彼等は他の革命運動を為す手配をそろへな
しつつあるのではないかと秘かに思へしめることい
軍事教育にある。学つて彼等は軍事を
敵とすることがある。敵とすることは彼等の
方針は表しに学生に味方とするやうなつた
現に彼等は表の軍事教育をみる革
命を目論む場合に立つての軍事
育のあることのみどうしても必要であるから、彼
等は之を敵とするの非を覚り、之を手段
けんとしてみるのも合理的である。彼等
は極秘に表陸軍の大業庫の不生地やその
内容をも調査したとみると云ふ話もあるとうか

明治天皇の御銅像

# 明治天皇の御銅像について

製作者　渡邊長男

○

本稿は記者が渡邊氏を訪問していろ〳〵座談を伺つた速記であります。記者の方の言葉は拔いて渡邊氏の話された分だけを分るやうに編輯しました。

渡邊氏は明治天皇の銅像謹作者として唯一の大家といつてさしつかへありません。宮中へ奉藏されてある大帝の銅像を第一として、水戸大洗の常陽紀念館の尊像も明治會本部奉安の尊像も、こんど府下連光寺の多摩聖蹟紀念館の馬上の尊像（本號卷頭の寫眞）もみんな渡邊氏の謹作であります。又渡邊氏は日蓮聖人の銅像も澤山つくつて各所に建てられてゐます。それらの事に關して御話しを承つたわけであります。

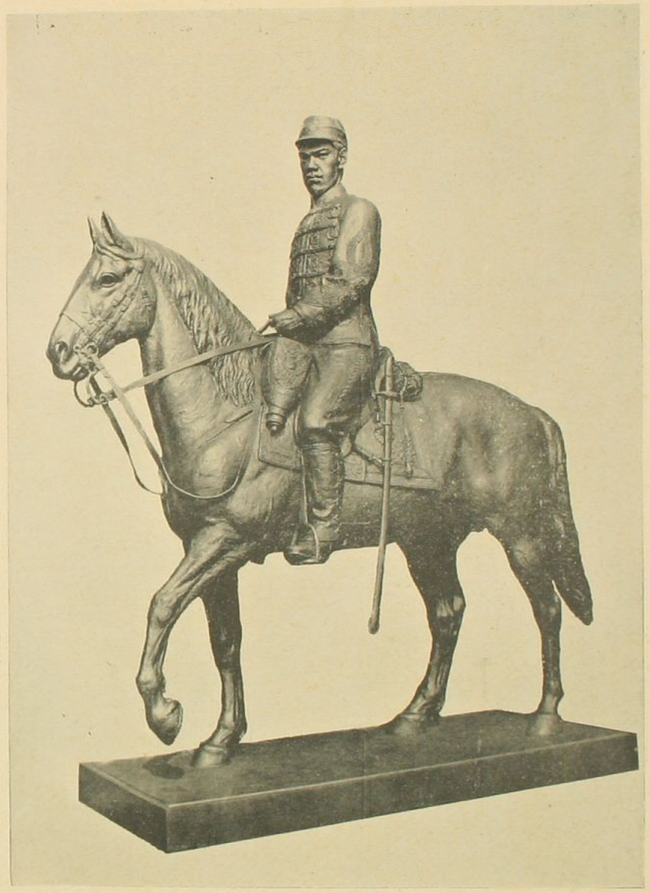
○

連光寺は御聖蹟地そのものがすでに比類のない聖蹟地ですから、御銅像もその當時のお姿をその儘偲ぶことが大切だと思ひます。

實はあの土地を持つてゐる人が、聖蹟紀念のために土地



馬上の明治天皇



東京府下多摩聖蹟紀念館に奉安せられたる御銅像

くゆかりのうるわしきことがある。十二月十日記

複原製

を提供するといふことになつて三萬坪の土地が提供されたのが始まりで、感激のもとに有志が田中伯を戴いたわけです。たしか一昨年の四月八日と思ひますが、紀念館を建てるのにその場所をきめたいからといふので、私は伯のお供をして參りましたが、それからがそも〳〵の始まりです。

紀念館は、始めは私が致す筈であつたんですが、京王閣を造りました技師で、關根といふ人がやりました。御覽の通り極くハイカラな近代式な行方になりましたが、それもいゝだらうとなつて決した譯です。

いゝことをするといつても、今日人の力を仰ぐといふことはなか〳〵出來ません、可成り骨を折りました、私も理事の一人になつてをりましたが、なか〳〵容易なことではありません、大事業です。明治天皇の聖蹟に對してあれだけの紀念事業を起したのは、他にはありません。

然し私はあれだけでは未だ完全せんといふ考へをもつてをります、明治の維新は所謂聖君名臣によつてなされたので、三條公なり、岩倉公なり、木戸とか大久保とか、さういふ方の銅像を、あの明治大帝の御銅像の附近に按配してひいては、明治の元老の人々、こゝまでいけば、明治天皇の御聖蹟としてすべてが充實する、かう私は思ひました。

私はそのつもりでゐましたが、第一期の事業として、紀念館の中に大帝のお姿を奉安するといふことに止めたのです。然し將來はさうしたいと思つてをります。

× × ×

大洗に奉安した、明治天皇の御銅像は、宮中のと寸分異ひません、大洗の常陽紀念館も田中老伯によつてはじめて出來たことです、田中老伯は御承知の通り、結構な御下賜品なぞを、一物も自分のところには止めないで、寄附せられました、自分が終つた時には、將來はどういふことにならないとも限らないから、完全なる保管をしてもらふには自分から感謝しなければならないといふお考へです。えらいものです。

維新志士の遺墨なども大したものです、丁度私が何時でしたか、瀧原におたづねした時に、三百六十何點とかいふ

ことでしたが、宮内省とか其の他の所に分けるのに、やつとその荷造りが終つたところでした、水戸の如きは甚だ結構なものばかりでした。

× × ×

建光寺の御銅像のお馬は、南部產の純日本種で、金華山といふ馬です。その鄭重が今日でも宮中の主馬寮にあります。それが丁度あの時分に、富山か何處かの勸業博覽會に出てゐましたが、それを拜見しませんでした、南部產の馬には南部產の特色があります、尻が圓いとかいろ〳〵その特色を主馬寮の人についてよく訊きまして、行儀の正しいところをやればよい譯ですから、それによつてやりました。南部產の馬は首が太くて肉があつて、足が太くて、尻が圓いのが特色です。

× × ×

御銅像は老伯のお考へも、その當時のお姿でなければいかんといふので、丁度その當時四回の行幸に對して御先導を奉仕しました。それと陸軍の當時の服裝を參酌してやりました。尤もそのお服は明治神宮の寶物殿に陳列してありますから、それを參考に致しました。

あのお姿はゲートルをつけてをられますが、それを不敬だとか、又お前立がないとかいふ者がありましたので、老伯はそれを一切いうて聞かせなければならんといつて、除幕式の當日演說されました。

その當時の、陛下の御洋服はロンドンに注文したもので、それが今寶物殿に陳列されてあります、それが始めてのお服です。

それにつきましても、毛唐の造つたものを、直接玉體につけてはいかんといふ議論が起つて、お服の裏に絹をあて、すつかり絹を縫ひつけました、そういふことがその當時ありましたそうです。

それでこの通常帽にお前立をつけると、それが軍帽になるのです、參謀に行幸になつた時は、そのお前立を取つておいでになつたのです。





それから[illegible]ですが、當日府中から河を渡つてお山の方にお進みになつて、富澤氏のところに御休憩になつた。それまでは短靴だつたんですが、これからお山に入るといふので、短靴をぬがれて、足袋と草鞋をつけられ、その上にゲートルをつけられました。それから向ノ岡の御駒櫻のところでお馬を下りられて、お徒歩でお出でになつたそうです。

そしてその時非常に獲物が澤山あつたので、はからず時間がおそくなつて、暮方になつて、御遊獵をお止めになつて下山せられたわけです、それから富澤氏のところにお立寄りになり、遲くなつてはみんなに迷惑をかけるといふ御說で、草鞋をとかれて短靴をお召しになり、ゲートルはその儘で府中までお歸りになつたのだそうです。その時沿道では松火を照らしたといふことです。

だからゲートルをおつけになつたお姿が本當に當時のお姿です、その大御心を考へると、實に有がたい、そのお姿がその村にとつて最も尊いといふ話しを、老伯が演說せられました。

今日の陛下のお姿を以て當時のお姿を考へる譯にはいきません、これは歷史的のことですから、然し實に有がたいことです。

それでお姿として拜しますと、ゲートルをつけたから尊嚴をどうとか、そんなことはありません、私の方はつとめて富澤氏の意見なり、伯の御意見なり、それから實物を拜見して、それによつて謹作致しました。

× × ×

明治大帝のお若い時の御像はほかには絕對にありません、お寫眞では御即位の時の立纓のお寫眞がはじめです、それから二三御胸像なぞがありますが、その後はみなキーヨソネの謹寫したものです。

私は大正元年に御銅像の謹作を遂げました時に、御寫眞の拜見を願つたんですが、無いのです。やつと大演習の時のぬすみ寫しのお寫眞が二三ありました、それを皆さんの御批判にのぼせて御批評致しました。

それから昭憲皇太后のお手許に五千圓ほど御肖像のお寫眞がありまして、それをお下げ下さいました。それはキーヨソネの謹寫です。それを御指定されてお下げになりました。キーヨソネの謹寫といふのは、なんでも見すみ見をなさつたんだらうと思ひます、繪は實にお立派です。

× × ×

それで、あの時分は、兎に角臣下として明治大帝のお委を批評するといふことは出來ないのですから、御像に對しては何にもいはない、つまり上御一人に對して、臣下が批評をすれば、アラも云はんならんからそれは出來ないといふことらしいのです。だから塑像に對して批判が出來ない、侍從職、皇太后職、其他の方々が、御銅像の前へ、順々に進まれて最敬禮をされて後ずさりしてお列びになる。柳原さんとか京極さんとか洋裝の儘で、ういふ樣なお方が七人ばかり御一人づゝ進まれて中腰になつてソットお委を御覽になる、そして後ずさりされる、やがて高倉侍從がそこに進んで切り口上でお話しがあつたばかりです。『そそつとおいでなさいませ』といふやうに言はれます、私は作家のことですから、正面から言はれた通りに直します。そういふ工合にやるのですから、その間はシンとして息づまるほどです。

その當時は、作者としては疑問だらけですから、お尋ねしたいことは澤山ありますが、それが出ません、どうしても出ません、我々は極きたないアトリエの中で什事をしつけてゐますから、十二月の末の寒い時でしたが、汗が出ました。

そういふ樣なことが再三ありまして、その後が研究になるのです。

侍從職の人はおなじみですから、控室に行つて、唯今は有がたうございましたといつて、時に如何でしやうあの點はときくのです。そこは場所でないから皆さんの感想をきくのです。それが私の一番參考になりました。

何といつても五千圓のお寫眞と陸軍の大演習（）の寫





眞と、それが元です、それ等身のもの元帥服を私のために毎日御寶藏から出していなうきましたことは、何とも實に感泣せざるを得ないわけです。

御かゝりの人が、ほし寺兵元帥服をお持ちになつて、テーブルの上において行かれます、それを手を清めて拜し、寸尺をとつて製作にかゝりました、それから被服の[illegible]に行つて研究しました。

宮中へは毎日通ひました、丁度八月から暮の二十八日までかゝりました。

× × ×

昭憲皇太后樣は御像の出來るのをお樂しみでゐらせられましたが、親しくおいで下されたのは二度でした、兎に角問題になりましたのはお顔の黑子で、もう少し下であるとて、お揚子でお印をして下さいました、そういふことがございました。

× × ×

多摩のお銅像は、精悍な御樣子には違ひありませんが、一光線が强いので、お顔がきつく見えますのは、[illegible]です。

御銅像はお身丈けは七尺位あります、お馬の足から陛下のお頭まで、丁度一丈あります、等身よりは餘程大きいのです。

最初は小さく雛形を造つて恰好を見まして、模型を造つてそれによつてのばしてゆきます。だから鑄造の前はその通りのものが出來てゐる譯です。さうしなければ鑄物は出來ません。

宮中に納まつてゐるお姿の塑像も私が御保管申上てをりましたが、若し此儘にしておいては、第一お粗末になるしなんとかしなければならんといふことを、田中伯に相談しましたら、それを宮內省に伯からお話になりました、結局献上といふことが一番よからうといふので、私から献上しました。石膏の御像です。それは京都の御所に奉安するといふことになりました。たゞ今は京都の御所に奉安されてをります。

なか〳〵一つの事を仕上げるにも種々の技術があるものですが、伯のやり方を見て私は實に、あゝいふ工合に進捗の仕事をされたと思つて感心しました。彼方に心配したり、此方にひつかゝつたりしてゐては仕事は出來ません。

× × ×

私は製作費のことを申しません、水戸の時も、伯があれを水戸に何するのに、製作費の方はどうするつもりかといはれましたが、私は、左樣です、おかげで實にこの光榮に浴してをります、私は陛下の御像については、絶對にそんな考へはもつてをりません、といひますと、よくわかつたといはれました。

それから多勝の方のことでも、渡邊がやるなら間違ひはないといはれましたが、私は自分の藝術家としての使命、自分の職業を以て奉仕するといふこと、又それが自分のすべきことだと思ひ、與へられた使命と考へてをります。

× × ×

私はこの前、伯の銅像の[illegible]に參りましたが、その時高井君にいふたことがあります、こゝにはどうしても藤田東湖先生の像を造らなければならんといつたのです、それが伯の耳にはいつたんです、そうすると宿屋に電話で一寸來てくれといふことです。私は一體伯なら伯に用があつても、用がすめば二度と訪問しません、事がすめばそれでいゝのですから、あとは決して一緒に居たりするといふことをしないのです、その意味に於て、私は別に伯になにする必要もないから、別に宿をとつてゐました、そうすると宿屋に電話で來てくれといふので、參りました、伯はイキナリ率直に、渡邊お前は藤田東湖先生を造るといふではないか、といひますので私は捧へますといひました、すると伯は、どういふ考へかと訊ねます、私は、この常陽紀念館として、伯の御配置を紀念する藤像の除幕をつげることになりましたが、あの事業をして完全なものにするには、水戸といふものはどうしても東湖先生のお姿がいると思ふ、これは國家の藤田で、水戸の勤王の本は東湖先生だ、東湖先生の像がどうしても水戸になくてはならんと思ひますといひました、すると伯は等身のものでも造るか、といひましたが、私は、一丈位のもの[illegible]ればならぬといつた。伯はそれを一人でやるのは大變ではないかといつたが、私は大事には違ないが出來ると思ふと答へました。すると伯は、藤田東湖先生を知つてをる者が東京のこれ〳〵のところにゐる、俺がその人に話しておくから、批評や何かすべてその人にきいたらよからうといふ話しでした。東京に歸るとすぐその人に伯から通じてくれました。その人は耳が聞えないので筆談です、伯からすつかりその人に話しがとゞいてゐました。そこで私は水戸に藤田東湖先生の像を造るつもりで決心してをります。

× × ×

私も藝術界にはいつて三十一年になりました、殆ど一度も官職につかずこうして來ましたから、もう五十七か八銅像を作つてをります。自己の藝術に滿足は一生出來ません、一生を通じて自分の思ふものが出來るかどうかといふのですが、然し經驗してをりますから、それだけに大切なものは責任を以て奉仕するといふ覺悟でをります。

× × ×

今年は日本海々戰の二十五年の紀念ですが、あの當時最も目ざましかつたのは日本海々戰で、僅か二日の間にあのロシヤの艦隊を全滅さした、それが日露戰爭の勝負を決した原因です。又明治天皇の御治世の中で、日露戰爭ほど大いなるものはない、今日こうあるといふのも一に日露戰爭のおかげです。そしてみるとあの日露戰爭の日本海々戰の時日本が勝て國民の血が湧いたが、その後の凱旋の時にも大騒ぎをしましたが、それは唯お祭り騒ぎに終つてしまつた。

ところが昨年の春にこういふことをやらうといふ議がありました。日本が今日世界の列强の間にあつてどうのこうのといつてをるが、何一つこれを本當に藝術的に永遠に紀念するものはない、殊に日露戰爭の如きには世界に對しても永遠に紀念することはしなければならん、殊に當時の聯合艦隊の司令長官東郷元帥も在世だし、海軍大臣の山本權兵衛伯もゐるし、たゞお祭り騒ぎをするといふのでなく、

永遠に紀念することは、藝術家の使命として考へなければならんといふので始めたのです。日本海々戰紀念塔の建設です。

とにかくこれは明治大帝の御稜威をはるかに表はすお姿を配したい、それから國家の柱石として、身命を國家にさゝげたあの時の東郷元帥はじめ各艦隊の司令官三將軍と、それから當時の海軍大臣と軍令部長、この五人の人達によつてあれだけのことが出來たのだから、この五人の像を配し、そして明治大帝から下された優渥なる詔勅、それを配して詔勅塔。[illegible]らのを中心として、五將軍を象徴しなければならん、そして同時に日露戰爭ですから弔祭場をつくつたらよい、ロシヤでは日本の何倍といふ兵隊が死んでゐるが、それも矢張り國家の爲に死んだのであるから、日本の兵士と共に祭つてやる、といふことで設計しました。

大體骨子が出來て、これからといふ所まで行きましたが內閣の更迭やつゞく財界の不況にあつて豫定通りに運ばないのは遺憾です。

× × ×

銅像をつくる藝術は、第一に少しも面影のない人、大變古い人、それが第一、第二には寫像だけが殘つてゐる人、これは昨日なくなつてもそうたるわけで、これが一番多い、その次には現在生きてゐる人、これはお手本があるのですから、それで出來なかつたら作家が悪いのです。

ところが製作について日蓮聖人の像が一番むづかしいといふわけは、像といふものはその人の體を通して眞を寫すにある、そうするとその人に作家がなるといふことが大切です。ところが日蓮聖人のやうな大菩薩には此方がかなれません、大概の人たらその人になり得るものですが、どうも高い人はそれが出來ません、そこに作家の煩悩があります。

日蓮聖人の銅像は清澄旭ノ森と府下の洗足ノ池と、比叡山の横川の定光院と、水戸大洗の護國堂と四ヶ所に四體つくりましたが、いづれも私の理想とは遠いものです。作家は必ず自分の理想に近い日蓮聖人をつくつて見たいと思つてをります。」

○歳晩二三書畫の収入多く敢て語とするに足らざれども、世の不景氣の連れあるを以て畫の價の如き特に拙き物にあらざるに、書畫界の無理解を起る度の毒殺を惜しむと共に、畫を嗜む人の貴重に関せざる主張を如何ともなしがたき事

一高山の長幅の墨山水、織屋義欽氏の墨梅清烟図を賞する要すべきものなり、晩年筆致を改め往々奇怪の畫を描く、世間多くこれを嘉賞すと雖も余は小宰ら中年温雅の品を愛す、此幅を

横原製

以所以なり

一昔古の四季花鳥横巻通し得本を表装者と美也畫の併と共に、余前日復刻十二ヶ月の昔古の畫を嗜めり而は飽かざれども嗜ふものは復故人の投の看なんとを思ふ出づ、此巻僅に十八金実に表装代也、画の價を評定する何ぞ思はざるや

一野津如洋の巻物孝経記とする前日更の低品の陳列を大隈会館に催す余は義を於て一瓶を嗜むさるを得ず乃ち民に得本樹下静馬二頭の図を嗜む、如洋の得意

とすべき馬の森の山の赤一のうるさきあるべし
を徒の霸氣の為あるを所ふ、余陳列場を
一巡して物の品雅の業を示すべき北國之及
ぶべきなし、之今如洋程度の書畫家の作
品皆價百圓を超過し、余等如洋の時流
を以て人に高き價を附する英人より注意し
たるべしの附け値い時に柄見合しなり

一 擬山園書帖十冊箱入 元王鐸の色を
四輯のごとくなるべし、余先年一部を購ふ
右時百方尋ねて僅かに獲たり、花色
全部を表切りの時、之を示す、今こ
れを遂に紙ちき偶ち山本書店

陳原製

こに之の刻に掲載の書を花せしことのよ
りも一等優る新版一帖あり、架ちり
紫紙基特面うも價も亦廉賜めて
まれに買ことなるべし

十二月十二日記

○特入図書三部を掲す、京都四中便利堂
今月配本として後宇多帝勅撰古根歌并
翌月発行の複製勅撰古根歌（ふるき）
去十年頃と推定さるる法大字本で之れも俗つて世
去十六年頃の法宮本が新れに流布しなるべし、この勅
版の天下一本で、林森大学の所蔵である、奈良の林
復古の藤漢特会の印記と弘前の藤江医学の

印記とがある。尚玲庵三七の解説が附添してある

○東美保乎郎の遺書を今こゝに刊り図書を渡す

今心のまゝ僅かれた左の三書を贈る

本朝水滸傳馬琴批　響庭蓋村　千字本

北書の赤尾こ蓋村の朱書ある

馬琴翁のうち千之の本朝水滸傳評言

を祝友大久保紫香子の孫為さる

を得て後長沼の編輯のいとま

くる宮しおいりめ　明治十三年十月

蓋村

破提宇子

横原製

北華把憂道人が木流に附し与美濃紙

本ゝゝ茶ゝ茶ゝあらきゝゝ、えんまゝ今

八咫烏こ浮かだし

白猫の旅日記二冊

旅中腸うけざる

ぬりやせまざる

八ゝゝゝ腸うけさる表紙すい三升を描

きやすくるる遠山を畫す、二九亭

花鳥とあり、白猫の自筆を改めるる

ゝゝゝゝ茶ゝ旅中の狂歌を多

くゝゝ、往々日蹄の板を図しるる

あり、二冊共巻末に白紙の裏張あり、何かの書の配り書と見くらべ、余の見るいこんが
如きもの也

東洞自筆遺墨

支盆東洞の漢詩を輯めたるものなり
菖蒲秀山の漢文の序あり　東洞の自
筆なり如何なる人なるや未だ

○柳亭種彦の田舎源氏は源氏物語の飜案にて
あることは言ひまでもなきなれども、その時の人は源氏
物語を知らず徳川氏の大奥の模様を写したの

複原製

なと考へるものが多かつたが、今のひとは、そうは思はなくなつ
たけれども、まんべんなく事実ひろく、全く
種彦の胸中から湧いて出た表現形容する所は
なにのあるを、種彦の工夫にこの点にあるあ
のに、北の水説が当時如人間を飜案
けれどもといふ考説以上のものであつた。偶々山口剛の
種彦研究を読んで見ると、左の如き記事があ
る、次の通り一部を見るべきなり

種彦為一生涯大奥の出中に長後
廻りを引き、お百姓を踏む者もあるなれば、中れ
重い役を勤めるべき松意といふのが、堀田の
法者く吉の同代老を立て、田舎源氏を供

へて傍信と祈禱された。事實野ゝ（しゝ暇
を物のたとふるに、関根只誠こんを物し列
侯醒小說史」こんをりの用ゝを以来今日迄の
切りてみる話とする所が、こんな事實はざらに
ある筈と皆が心得てかゝる「奥羽氏」の金盛
ぢやうに

四奥羽氏は其の金盛の真最中三十八編ぢや絶
しとある。三十八篇以下の草稿はいつか程度の
親疎からおさまれることがある、その字が山口の
著の基首に収めてある。一筆庵が後稿を出し
たる種屋の稿本を新発見したるものと山口氏
をみる。

○北洲乙骨耐軒の自筆本一束が坂河氏現はれたのび
自家の著述ひもあることを指摘を見ること全元無つたん
失敗して以来、揚城高の持物が多くなるにつれ
と相ひも蜂の如く。大正時代佛教学が盛んに出版され
吳鈴本の内持と絶句のみを録したるあるを往々
数見る。校勘のがある、耐軒の細字が巧みびや佛の
ごとく似てある、北洲先家の字本を多く蒐集してゐ
るそれこれも其の部数を入れつゝ

○日本の名山図会八文晁と書かれたるがあるが、欧米
の美の無へ、僅こうれあるは京路北海が欧米山水
勝二冊と名の高れが小形本び多くの○瀑を
いと出版されたものがあるる。外国の山水の特

榛原製

激を西洋第二芸術界に投入するの所以の出発点なるべき、展覧会は所謂新を供することも出来る、近来こを西洋家が西洋に倣ぶやうなる傾向既往に於て決して多く無つれども、外国の山水は日本に倣つてみるべく、北海はつとめてスケッチを取り美を公刊することなるべつれども、北人は通称得三と称する往年森林大人の招りて外国を使し其席上独逸にあつれば森林の長の入り得て志きり各山を訪ねてスケッチを取つたことがある、書もなかなか上手であるが宮内卿の人と見るべきであるから自分のまぐれ其人に交つたのが近年北人のスケッチ集が手に入つた。それは百七十五図を

複原製

大アルバムに拵へしもの、既に出版のものが多いが日本の山水は七十分の六つ交つてゐる。刊本の図の原稿と見るべきもの、其中に数枚を抜きとるやうな事にもなんとある。刊本と合せて研究されたきものである。

○時代相は書画も変る現にさ、八十年前も変るものが、工芸品のみならず、美術界も言近ずの現のようなことは言はれぬ。細かな点が飽かけつりかうの一本の新の新やうも時代相が見られる。

いにしへ、ある日本画家の兵庫県の兵庫の番山人北斗翁なる者の也も其比絵画と心合の絵が有る、其内七名と共つたものの蘭舎侍の切り口を就て一考

**黄熟香即蘭奢待**――

なる長さ四五尺もある大香木でありて、その三ヶ所に二三寸宛程の截り取りたる痕跡に就てである。

第一回、足利義政に賜りたる截りあとは、自ら優美なる東山期の美術を聯想するが如き、強からず弱からず、自然に風流を存するものであるが、信長の賜はりたる痕跡は、まさか信長自身が切り取る筈も無けれど、肉厚の鋸あとが歴然とし、痕跡頗る雄偉の感を與ふるものである。

ところが夫れより年を閲すること三百四年後の明治十年となると、總べての藝術美術が根本的の力を失ひたるが如く、一般の人間が輕薄に陷り、放縱に流れたるに等しく、明治初葉に於ける、勅命に成る鋸の跡は、そも何人の奉仕參らせる業なりやは知らざれども甚だ底力なき、あどけ無きものにして、明治丁丑前後に於ける、職工的工藝美術に見るが如き、乾燥無味なる薄つぺら極まる、情なき感じを表現し、轉た吾人をして、時代と云ふものゝ力の如何ともなし能はざるを痛感せしめ、慨嘆に堪へざらしめたのである。

これを截り取るに就ては、素より無意識の中に、その痕跡などに殘るべき印象等は毫も思念せず、執り行はれたるものであらう。

然るにも拘らず、其一々の刀痕に一々の時代相を表現して餘りある事を目撃するに至つては、吾人は彼の樗牛が言とな

す、現代を超越云々の如きは、一の夢想にして、いかに千萬程の理想に向つて努力を拂はんも、所詮不可能事たる事を、悟らざらんと欲するも能はざる次第である。

あを下し、鋸のひきわたる時代れかくるとゝあるのハ明治ひあるる　十二月十書記

榛原製

○此夜復書　今日人と共に面白き議論を聞く　行く、文人例の如く医猫の書を出して示さる　日不しきものゝ古鈔本論語数種皆大概文彦の筆跡なるもの也

一　論語義疏

文政十九年写本七冊　内閣の印記に花押　もう四家考を引く云々也

一　論語義疏

巻尾に左の識語有

土冊

右本清家秘蔵也 剛毫書道白点筆
六寸之　三十部一双

論語義疏　十冊
寶勝院山義

偽孔論語　三卷
今都偽孔 後人のかきたるとしるし 筆者を
菅原立茂とするも 北人元弘四の人
し 高山寺の印あり、もと冊子なりしを
巻にしるかゆし、諸方と異校の書多
し 当時の言葉をひもとんで伝つて微

横京製

することを得
以上四種何れも鈔写前と見らるべき
ものなり 正平論語の体を備具せるなり
見へたり

一孟子 舊鈔本　五冊
桃方の四巻 印記あり 任藩沿革考
：奴の為るい此本ン

一毛詩　五冊
日本版を底本とし 古鈔本に拠り校正
したることを森立之の書入板頭に多
く 従て桃方の朱印あり、巻尾に

市野迷庵の寫稿なり林崎文庫のも
花とす

一法華經　八巻

全部に振假名あり本文と異に點版也
巻末に
寛安五年三月十四日　希果拜也
とあり霞山淨玄日啓の什也
元と同一經に別版あり字体を比
經に比較するに字体較り優なること見
優れつき經のなかなかきものか

北外寛永頃の流布本千字文一
冊正保三年江戸開板の版行本なる
鏡の一種也）を見るべし

○四流の中頃林忠正と云人の手になる深草紙
が外國に輸出されたことは既に述べたる事實なるが
其の輸出の部分の品目表に價を付細に書き
記し此林高庵の帳簿が北海道に現存せし林荒
樹の嫡孫なる氏より見せられ其紙に
なる部分の品目や説明や價格を記して
が五十冊もあるを見ること深世紙もあるけれども
外人の嗜好や趣味を推察するやうな各般のものがある

根付や鍔の類い勿論、富岡の浦賀の内うの行燈
まじりなくしてある。試みに海世絵の値段をあげると
皆見えます。今日あるものは彩色をしたもの
錦絵が初めて出た頃は、浮世絵若紙の数枚あるものを
このが用いつく、浮世絵若紙の数枚あるものを
中ごろ見へてもあるが、また錦絵ばかりの大體高
い値が付きんもあるが。静かな研究しなければ、南
蛮輸出の状況がわかれて外国貿易の珠と美術品
の輸出に就ても考察の志料となるべきもの
○古本屋の発生の由来は四流年間に発行されたもの
多く人に顧りみられずして本屋に今見ると一枚
に幾ばくの価値あるい、此頃の古本屋

榛原製

類の大日本中興先哲志(三冊)を拾い上げて来た。
こんい漢文に維新殉難志士の傳を書いたものが
支那と上梓さん、金粟斎庚本である。古本に多く漢
文で書を書いて旦つ支那と上梓したものがいく
らかある。此の先哲志ものは支那人に渡すもの
目的で書いたものであるが、なるべくこと多い
の興と云えるが、旦つ行文も簡潔で、当時の傳べき
人物の行状履歴が見を傳うてみて、後世の
も補法である。殉難志士の功を収めたものは
三條岩倉である。代表的こ此の二人の傳
を最後に掲げてある。支那
人に此の本が渡ったら後世に此の先哲志を思ひつきである。

が、日本を指すべき書である。

同じく面白味で拾い上げたものに、支那で出版された上海の申江勝景圖（二冊）で、上海の名跡を図示し解説を加えた一冊が備わっている。光緒十年の出版である。

つから我国は十七年を経るが、国政の改革を西洋文化の程度のものが多くあっても、当時の日本の実況と比較すると、上海の方が遙かに進んでいるかに思われる。北方の輝彩や印刷の精巧は日本の市場のものよりも優れている。由来石印の術は支那の方が早く開けて光緒の初年には既に石印の

榛原製

揚げたものとなく、巻頭に印刷工場の図があるが可なり規模の大なることもあるものらしい。自分は上海に滞在したことも見たことも未だ其の機会を得ないが、こんなものを玩味して心やりとしている。

○春城漫筆が北海道新報に掲載されて既に十の数を経過し、長短二十件の談が収められた。何分自分で覚えるに多く書きつけた雑録中のものなれば、人を示す為めにこれを掲載するに、亦新らしき材料を提供するものもあるが、どうも誤謬の多いのは遺憾である。

色々な点に於ても足らぬ点もあるが、機嫌の悪いのは上の方だから、今更仕

方がよい、神業などされら都つも氣に吟いなの
所がウント生まるる相違るいから、茶こえんを禁
してある。但し閉口するの印捺の切り方がめ
るも遺憾であることで、誤捺のないことは男舎
諸人の若者といふく、誤捺の際れ毎々不快を
感セしめる。

○坊間を渡る反故中に二三のものを見る
雖も、こうしたものあるきめも活動寫真に
まるるるる新聞の伝ちきるもの、其
反故四枚（文久十二、十三年）堀野馬もの
を伝馬差出命令書」三条寺河原の
名物見る、他の一は法印免許状なる寛保十九

年七月廿一の附、紙伝四 神原郡大田村清性
坊宛の奉ものを年新月日の京に聴聞三山を
朱印形印なる紙の背面に義三子御廣所の
印を捺す、其全文左のごとく

伝都御免こと
被仰付百姓の有伝何者
検校書伝御郡
三山奉行若手御廣不敢
御出也仍執達如件

寛保十九年七月廿一日 源精快 南義押

法橋定座長押

清性坊

愛中に何れも收めおく　　義助筆

○嚴島の古和歌うれ二三の書を將ゝ

一はちうのき　　二冊

此の書世間に多く流布せるも所

若き頃本こゝに妙を萬流版を

得て、えん珠書とするべし

一　忠義武道播磨石　六本合一冊

寛永版の北書嘉穀の後雖義

榛原製

筆を執りしなるべし　されど古きこゝろ

まゝ立直し惠めの余北書を愛す、勞

て西村天因此書を評論し且つ世に

流布の忠臣義の面を比較しなる

ことあり、今の人既に元國の北書を

ゆゝしき況人や北播磨石をや、余が

愛玉の除地也をも編め得さるし

かゝる坊間に奇の書にても名を

立しなる由義見し　婚ゝて

悔くゝ、余の妻の時三十四許と

愛の如きこゝろあり、今の十四を越す、愛

戒しの仕合と得ゝて可也

一 去今要覽稿 嘆願部 写一冊

これ雲をもちゐる仕立方の図写本

をものの也入あるを表ぶ

○旅法「主婦之友」の巻辰の特記に足る、一月號八

八十番部に達す、旅紙就ての附録を落くるの時なれば

旅法に二冊の附録を落くるの一は家庭衛生と

就ての冊子（紙数四十頁あるもの）一は（運命判

断に就ての小冊）三冊合して八十錢也、別に附録

まも落くしよくも定価ひ引合うものかと、ゆくくしく見

んが更に儲けなく、唯此度の紙中なる

なるの十番目に達す、うんと儲けとなるべきが

本旅法を度度まるる五番目位の度を要

と要するとするも五番目の儲けある勘定也

不篤義の形柄任せ居れば坊ちゃんと云べし

此旅法の長く要る時間劇全社の振合す

る不也

○山科有明公が去切に病者を探し

なるの手を入る

甲辰の役某將軍行うと出城

おくりて

いつも先きのつらさりしにいくさ人

おくりていえふ方こと考ぬれ

時事有感

いうしも君にあくいんかくるとき
いはるきなくうゝ老ひける身は
雪のあるけるを湯殿山をおもひ
やりて
ちるかうるまどの雪うもれ支那の
あら浪の吹雪おもひこそやん
乙巳の年新年
まゝひとつ年をかゝえるけり歌ひの
うちに四ひの年はむかへて
新年山
あるきみる山もうらひをあるみけり
かちときどよる年をあるくて

榛原製

大石巻えあるて
岡七手に氷りやうあきれ支那の
ゆうべのあるん玉とちる庵を
春祝
かちときの新うをうもよるの代と
もうこしうけもいたの書うふ
大本巻ひあるて
そうこうの家のひゝきれ歌ひの
つう吉さくゆこしてし
有明

○雪岡市過ぐで獲ひ二日ひあるて

一郡名考　二冊

これハ古本敦書（昆陽）が若いしたる
で郡名の変遷）を考証したるもの、刻
本を此方あることハ自分ハ知らぬ

一日本国見在書目録　一帖

日本の書史等に大切なることハ云ふ
までもなく、これハ室生寺を係いる若
名を舊鈔本の面目をつくり係
へた影写本で書目の組し方ハ上代
式の異の所があることも知れる事つ
ての冊後の記事であるとも見

榛原製

へ二點の朱印が捺してある、若し此の
影本を他の古書家の間に移産さ
へたことがある、これも多分其ハ必ずれ
ものであらう　價三十五圓也

十二月廿の録

（第三種郵便物認可）　昭和五年十二月二十一日　（日曜日）　東

死後も盡きぬ因縁か

# 露帝と津田三藏の埋め塲所判る

## パリ近郊と北海道の果とで不思議にも同時に

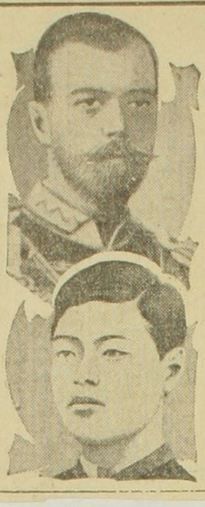
【ニューヨーク廿十九日發】ロシア最後の皇帝ニコラス二世とその家族の遺骸の行方について十九日のニューヨーク・タイムス紙は前ハルビン駐在米國副領事フランクリン・クラーキン氏のロからもらされた小說的事實を發表して異常な大衆的興味を喚起した

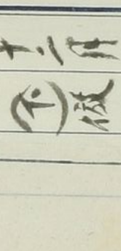
史上傳へらるところではニコラス二世とその一族は一九一八年エカテリンブルグにて過激派の頭目ユールコウスキー等の手で銃殺され遺骸は現場付近で焼棄されたとなつてゐるがクラーキン氏の語るところに據るとその遺骸は一九一九年米赤衝車の目をかすめて人知れず米國領專用列車でオムスクからハルビンへ送られそれから上海へ、次いでイタリーのある港へそして結局フランスに到着し現在はパリ近郊の大戰後シベリアに駐在したチエッコ軍團の佛軍司令官ジヤナン將軍家の墓所に葬られてあるといふことである

更にタイムス紙の報道するところによればジヤナン將軍の近義の中にもそれらの遺骸が同家の墓所に納められてある事實が記載されてゐるからこれは確實と見てよいと

◇　◇

【旭川電話】明治二十四年五月八日露國皇太子ニコラス殿下に斬りつけ湖南事件として有名な巡査津田三藏は北海道網走監獄に收容されたがその後の消息はたれ知る者もなく網走監獄も明治四十二年四月十一日の火災で書類もなくなつたので全く不明であつたが旭川憲兵隊長馬場少佐が調査した結果標津分監に收容された後死亡し同地に葬られたことが確明した當時問題の男が北海道の果で死んだことは歴史家の興味を引くことであらう【寫眞は上露帝、下津田三藏】





○弥本の先生集家が一刻後を他人の手を借りて殘
念ながら流し八分七巻くらいなるべし。龍合龍手鑑
八木村正辭儒士の自慢の本で、学ぶべきことあり
まが、これを木村が手に入れ時の事が作り本住所
を使って支蕃春秋と出版をする。
去年の夏のこと、龍合龍手鑑の古版本を得たという手紙が来
たので、望翁早く行って購ひたいものだ。神田橋
辺の柳の茂った、すんだ所をたづねる
と、向かから里川春村が汗を拭きく急いで
やってくる。木村先生は見つけて、何急くと問か
と、いや一寸越ってくるとの。龍合龍手鑑の数

榛原製

冊を買ったと風呂敷包を振って、越行くの用へ
こんでいるのかと云ったら、春村の屋かつれくと
云って、殘念ながらと云ったことがある。
春村は里川真秋の父で、里川家の図書蔵は春
村を注ぐから他まるることが知れる。龍合龍手鑑
は家もびある。
○三上巻次と云ふ名が数多の家の蔵書利長文の儒士
しめる興を感じさせたことがある。北の名は三の上で三の次と
云ふことがある。これを雑し記録し記めが三と云ふ
由書きとあるが、三上が大学教授在職廿五年の
祝賀会が開かれた時、三の西園つくしの祝辞を
陳べし伝と春清は出席出来なかった。

[illegible]

近刊の文藝春秋を見て[illegible]
笑してこゝに切りぬきを[illegible]
○唐土名山圖會三冊は鈴木芙蓉の寄[illegible]
書かれるものが文晁の名山圖會と共に花鳥[illegible]
き雅い趣味の本である。昔しは支那の有名な五岳
などゝいふ容は日本を縮[illegible]家が宝恵を[illegible]
こゝいはるゝ[illegible]
いまの何んびもキヨ[illegible]
く[illegible]
一寸待[illegible]
ある。[illegible]

榛原製

讀して貰ふことにした。丁度その當日築地水交社に於ける海相主催の午餐會に於て田中館博士に會ひ、博士がその晩の三上氏祝賀會に出席せらるゝを確かめ、此れ幸と同博士に此の三づくしを託したのである。

祝辭代りの三づくし

君の姓は三上、君の名は三次、恰も是れ振子の擺動するが如く、落着くところは三にして、三は目出度くも亦面白き數なれば、三に因みて君の在職二十五年を壽き申さん。

三種の神器は申すも畏し、所は三都の隨一東京市、而かも三橋より程遠からぬ上野の森の精養軒、時しも頃は七五三の祝ひ月、今日の祝賀に三學部時代の若衆振り、三三九度の盃や三國一の婿殿といはれ給ひし、その昔をば偲ばるることもやあらん。

三體問題（Problem of Three Bodies）の解決は以て宇宙の安定を語るべし。机は三本の足にて支へられ、その餘の足は皆浮き足と知るべし。一米突は三尺三寸、一碼は三呎、三四五の直角は、古來我が國の大工獨特の當意即妙なり。字體に眞行草の三通りあれば、寫眞に三色版あり。電流に三相あり、劍橋大學には三脚試驗（Triposo）あり、宗教に三位一體（Trinity）の教義あり。議論に三段論法あれば、小說に三四郎あり、祝日の三大節。三月三日の雛祭り、富豪の三井三菱。大部の書物に和漢三才圖繪あり、生前正一位に昇りたる人三人、儒者にして大臣となれる者も亦三人、我が日本の三景に大隈伯を加ふるが如きは無用の沙汰なり。三權分立は國家組織の要素とかや、我が國に三政黨あれば、從つて三黨首のあるに不思議は無けれど、其の三黨首が三浦耶に會合せるは面白い。我が國の三幅對や西洋の Trio は數限りなし。三度目には正直に、三人寄れば文殊の智慧、三人行けば我が師あり。三寸の舌は愼むべし、三號雜誌は世の浮草、儀式に三寶御祝儀に三番叟、風呂屋に三助、奮所にを三どん。歐洲戰は三年越し、三十三に三足して逃ぐる伊太利亞氣遣はし、獨逸の三すくみ、佛朗西の三色旗が伯林城頭に翻へるの日は三秋の思ひ。佛教に三千世界や三世相あれば、義太夫に三十三間堂あり、三つ違ひの兄さんもある。花井卓藏氏の三百といふは三百なりといふ名論に魅せられ、拍手喝采して衆議院の守衛に引捕はれた博士もある。七福神は元來は惠美須大黑辨天の三福神なりしとかや。世が文明に進むとは表向きの言ひ草、內實は慾の皮の膨脹發展、福の神の定員が次第に增したるものにして、今日此の頃は當時ときめく美利劍（Bilikin）や、子供の好きな三太庫臼（Santa Claus）の叔父さんまでがいつのまにやら舞込んで、三三が九福神となりにけり。前世紀と今世紀との分岐點は明治三十三年にして、三韓は疾くに我が版圖に入り、我が國運の日淸日露日獨の三戰役を經て益々發展向上しつつあるぞ嘉しき。

君は恒に三省して淸慎勤の三事に勉め、中庸は三十三章より成り、其の三知三行三近は以て君の性行を表はすべし。三樂の三番目は天下の英才を集めて之を教育するにありと聞く、移して以て君の嗜好を語るべし。君の史學的研鑽は三昧に入りて、君の功績は三光と其の耀輝を競ふ、君は人生五十に三足した慶應元年生れ、斯く申す拙者は文久元年九月九日酉の年の酉の月の酉の日、三つ揃ひの酉の年月日に生れたる者にて候。歐陽永叔は文字を思索する三上にあり、三上とは馬上机上厠上なりといへり。其の三番目の厠上の思索に餘念なき三字姓の田中館大人に此の讃言を託することとなれるも亦不思議の奇緣ならずや。

千代八千代メて三三千代
末かけて江戸文學の花や咲
くらん

とえんをへて知れぬ奴が出て来たといおのつから遠を異にする。北の名山図会を海名山記の挿絵を出版するにいたりしものである。志かし原図ともに出来てゐる。志かを名花するこの方が既に便利である。東和の異上梓さん巻端に川渡図の序かある。支那に大図ありけれ山脈の雄偉は日本の及ぶ所ではない。勝繁の図面は計ち五、版元は文錦の名山四冊を出版した千鍾房である。

○山陽翁の自筆文二冊を拝見した。草稿であるが、手本体のうまい草稿の筆、或は米法を習はんと千里遠く

ちきりをうけるのもあるん、後藤の識語と学徒の浄を待一頁つゝ書き出すとあるが信ずる能はず、墨色は新しいが、日を異にして書きかゝる形迹ある。

十二月朱三日

○先日山陽翁無款の文不完二冊差入の入来後書翰閲来酒五撰古抗余来出法大変美也抗其特一変して法也撰史墨有清渓者墨也一頁以興写者、浄也来也西輔又也一頁興之故有此異且造物書室諸唐墨也故借之耶

嘉永辛亥初月距翁没天保壬辰第花月凡二十年矣

# 郷土愛

市島春城

**火山**が破裂したり地震が起つたりして恐ろしい土地でも、そこの人々は別に地を選んで移ることをしない。恐ろしいことが記憶から薄らぐと、直ちにそこに家を造る。郷土はそれほど離れ難い處である。外國に出かける人は、一年位經つと、懐郷病に罹ることが幾人も例となつてゐる。

嫁することを欲しない、如此して田園は日一日荒れつゝある。何故に墳墓の地を棄てゝ、好んで死地に就くのであるか。都門は石や瓦やコンクリートやアスファルトで固められた所で、道を歩いても土は幾らも見ることが出來ない。慈母のない修羅場が即ち都會であるのだ。

**國を**愛することは郷土を愛することから始まる。大きく云へば國も郷土であるけれど、己れが生れて育つた土地ほど親しみあり、愛すべき所は無いのである。郷曲の美を說くことがやがて國の美を說くのである。郷曲を誇ることが、郷土を愛する至情より、郷土に歸休して、地方振興に力を盡すに在り。地方に爲すべきことは頗る多般で決して事業の無きを憂へぬ。それを放擲して行詰りたる都門にのみ事を營まんとするのは無理の沙汰と云はねばならぬ。徒らに僥倖を贏ち得んと妄進する輩を都門に堰き止めんとするには、郷土の先輩で都門に在るものが自から「不如歸」を叫んで、郷土に歸休するの範を垂るゝに在りと信ずる。然らずんば都門は失業者を以つて溢れ、田園は荒廢に歸せんとする。吾輩が郷土愛を新年の首端に敢て提唱せんとする所以は此處にある。

母である。郷土の土は其等一家の母である。土なくして其等が何んとして生れようぞ、墓はしいは土ぞ、三四ヶ月も雪に埋もれて土を見ることの出來ない山村の人が、都會地に出て土烟の颺るのを見て痛快に感ずるのも、土が慕はしいからである。地雷爆破、彈丸飛下の戰場に、身を托して危險を避くる所は土の窪みより外は無い、塹壕は勿論砲彈の地を穿ちたる穴などでも身を托して死を免かるる所である。兵士は土にシガミツク宛から慈母に縋ると一般である。戰場に於ては正しく土が慈母である。若し此の慈母無かりせば歐洲大戰は或は人を全滅したかも知れぬ。

昔しは家山を辭して都會に出ることが容易で無かつた。男兒志を立てゝ郷關を出づなど云ふて、錦を衣て歸來家山に見ゆることを誓つたものである。今はどうかと云ふと、無闇矢鱈に家山に背いて都門に押し寄せる。敢て分列がある譯でない。失業の群に飛び込んで何んの得る所がある。壯丁は田圃の土に親しむを好まず、女子も亦土臭い男子に

**獨り**文學上の事のみでない社會上の事でも、產業上の事でも逸材が郷土に在れば沈帶せる地方も警醒され誘掖され諸般の事業も起り、徒らに都門に走る者をして其愚を覺らしむるであらう。今日の憂は各地に逸才を缺くに在る、實は各地に逸才が無いのではないが、それが皆他郷殊に都會に集つて郷土に歸休せざることが各地に人物の缺乏を來す所以であり、今日の急は求めて、いろ〳〵の書物を著はす丈でも、郷土の光りを發することが少なくない。若しそれが一人に止まらなかつたならば尙ほ更らの事であらう

如何に郷土は戀しいものかゞ知れる。其筈である、郷土は自分の生れた所である。親兄弟も先祖も生れた所である。墳墓の地である。已れの家の歷史の存する所である。郷土を取卷く山々、郷土を貫く河々、それ等は皆祖宗以來嘗つて變らない自然で、吾等が今親んで朝夕に眺めるやうに、祖宗も曾つて眺めたものである。小兒の時に遊んだ寺や宮の境內は今も依然存在してゐる。小兒の時に戯れに攀ちた樹木も今尙健在である。郷土のあらゆるものが懐舊の念をそゝつて堪へ難い感じを起す、郷土ほどなつかしい所はない。郷土を慕ふことは人の至情である。人の本能である。

**嗚呼**土よ、土は萬物のとがやがて國を誇るの心である。何れの郷土に於ても特殊の山川あり風景あり史蹟あり物產あり習慣がある。郷土美は乃ち此等の內に存するものである。しかしその美なる所以を知らねば、愛も起らぬ道理であるから、郷土を愛するものは、郷土美の發揚に力めねばならぬ。近來各地に目醒めた篤志家が郷土研究を始め郷土志料を蒐めたり、史蹟を探討したり隱れた人物を顯彰したりすることが起つて來たのは頗る喜ぶべきことで、如斯は正しく愛國者の仕業である。兎角郷土の研究は郷土に在つてでなければ出來ないことで、其人が其の土地に備はることは喜ばしいことだ。僅かに一人の文學者が郷里に歸休し、手近かく材料を家郷に

○支那日本の風景美を外国と比較するに一文を為すに美術中に日本の樹木の風景の要素となることの多大なるを特に松杉樹なると特に北海道に無いことを挙げたが、後の公園樹を通じて巡ひ南つた。北樹は外国と絶対に無いものである。日本から移されたものと云はれが甚だ稀なものであつた、日本から移されたものと云はれるのは伊太利から、これを通じてもいろいろのものと氣がついた。公園樹の風容なる霊木で、第一木が堂々としてゐる。然るに風致的なる、美の形式、そんが美はもとより美がおもしろい。後者は風致的なる、美の脱しれ枝の立る数多く有く美の脱しれ枝の有くんるも風味がある。寺や宮の境内なる光

樣原勲

樹がありて、そんが風致を深くする資料となるとあることは特に樹の脱こ枝ると北樹は前世界の遺物なるとこ云ふことを思ひ起こさしめる。友人新村出博士が北樹を愛したるの陶庵漫筆に信ずと四こんもどの感容を異する樹の形して古くから和歌かるのとこ云ふことがある。そんから推して上代なる日本こ無つたがいろいろかと疑つてゐる。光いどうか分らるのが、光こ角公園樹に注意を拂ふやうなのは近年の事である平瀬作五郎が北の銀杏の生殖応用を研究

して特徴のあることを発見したことも明治廿七年
のまこと属する。街樹としては東京市中に植へ初めた
のも近年のまこと属する。文人が詩や歌を入れ出し
たまことが始まることもあるとも近世のまこと
あるとも。ゲーテが公園樹を特別に愛を
寄せた逸話があるとか或は刺激したのかもしれぬ。
日本特有のものを外国人から教へられて其美を
礼讃するばかりあるまへの兎角邦人は忘れ
いことがあるのを自辱的に思ふ。実は銀杏は
日本の少女がお守の玩具に供する
ことから久しくお名染のものだ。其の葉に板味
がありも去れ実を防ぐの作用から久しく陵書

榛原製

こまれて貴ばれる葉は桜花の四方の中
を挿められたことの比。北方が四日と云ふ書物の表
紙に用ひられて銀杏の葉を描くことも行はれ
たし比位だ。自分などは北の表徴の表徴をひど
く喜ぶ人だこの比。何も外国の詩人の送辞から
かれ東京は北樹を離有り難がるも常ならぬ
ある。東京の銀杏はもとあつた柳を引抜いて公園
樹と換へた次風流人は柳を惜んで紙片の風致を
賞することとし、公園樹を罵倒したるもあるが
北樹は公園樹は街樹として寧ろ適当だ。風致の
校なる法しも柳に譲ることの東京市中で
公園や校庭や街頭の植へは無数の北樹が新

追々生長しなば、東京を大なる風波を深く銀杏都
とかのつく時ゆ来るべきなり。　十二月廿七日記
の系出仲を）き及故海ゆをして四方の関所
証文を得て、天保弘化頃のごとくなるからさ
んがち二通は雄勝の関所証文、外にもなる）紙
後通沢郡のこの上物大戸の関所を脇名）を
しるす書まで記念を命せん吟味の末曲
命を得る際証人日暮を差出し証文い
ずれ御上に関係直して旦つ当時関所破り
が皆こと文物はんなる一端をも変へ得べき
ことなれば此一条のみ特に目ぶーをさるべ
也

指上戸一札ことり

一　紙後回通沢郡上四ことを左に下一の市村
義右ヱ門回通沢郡村美七辰
ことを中江戸、東公に紙後ゆれ出ずべき
回用をえ紙ゆ色ノ四月五日紙後ゆ
西上物大戸村の関所脇道仕に付西
沢金ヱ仰付義今ゆ吟味ことの
命ゆ動御預け成ことを脇名を左に
ことを書出指上てし為後の仰付
回沢郡村　河内成

午六月廿日　無沢郡上四ことを左に
下の市村左ゆ

懷古座談會

向つて右より 太田錦三郎氏、利根吉氏、山内譲氏、坪谷善四郎氏、松本孝一氏

小林三郎氏

ゴーニ手ヶ間下段然神



六兵衛 印

大津村四村庄屋

伊左ヱ門 印

横津村大肝煎

井口孫兵衛 印

魚沢郡代行大こ 兵衛 印

中山路兵左ヱ門 印

北文書類ハ鶴羽雅義別集第弐巻ニ収めおく

右先代同方御場合ハ横大庄屋の逸記ハ日記伝一月羅と掲載されたが、其後の事ハ不明なるをこゝに収めおく

標原製

○早大の学生騒動二度片付きなんとも面白き事あり氣分濃りいつ再燃ちんも知るべからざる形勢也 湖傳

ものの学生を京阪にまきちらす事勿論なれども、或る方面の心ある生は不安の念を抱き、いつこの事件を変化べしとの事あり、警官、学生を捕縛し、拷問を試し、その裏に活路を求めんとす、あまりこの事あるが、あまりのうるさきもなるべし、なんぞの騒擾を無保件に済ますこときは教育の威信を損ふこと甚しく、再来学生が荒れて長上に過ぎる礼をなさざるこまるのみとあり

矢東の行大学に活花まきちらす学生は八百を以て数

ふるひて学数は無産者に属し、なるとか、追ふ無産者が物を得らるるの形勢なれば、早大の如き今は所謂新や大山を生ずべしとの無くなるべしと云ふ形勢は裏しなるの彼等の教授も日一日進歩し、公然に公然論じなるの今は学を静めて活行をなるべし、多衆の合同を避けて人目を忍び、授業今なるの拙しも三名五名合まるとこのことき戦法を用ひ、斯の秘密の行動は有名花蹴まも寒心すべきことあり、彼等は未来心清潔なるべきことを秘密に行ふ者居り、学課程表のことをもなるべき速成科をもあべきは十の間違なれども大学をも

[illegible]一清の提唱が定めん哉、八三十日程[illegible]集
と云ふこの一冊と念入の[illegible]まゝ読むべきもの
[illegible]も拙[illegible]新の工風[illegible]
四[illegible]行のあつあるを何人か輸入[illegible]
[illegible]は故等の用意[illegible]
[illegible]

あゝ[illegible]清廉に[illegible]行く教育界の表化此由[illegible]
いと文義の音[illegible]文部省の[illegible]めつとゝんば
[illegible]
[illegible]の容易[illegible]
も出まず初めて北方[illegible]（[illegible]）の[illegible]
示[illegible]現[illegible]三日[illegible]朝

横原製

[illegible]べ[illegible]の長[illegible]
[illegible]研究[illegible]
とかゝる和会が[illegible]どうやら[illegible]会
人[illegible]と[illegible]文[illegible]。[illegible]布[illegible]
徒[illegible]文[illegible]帰り[illegible]
本[illegible]
[illegible]
動力を[illegible]

◎下谷文[illegible]堂を[illegible]の二色を[illegible]

朝鮮聘使後書　一冊

世[illegible]本[illegible]印記あり巻末
[illegible]外[illegible]茶宮の[illegible]あり、天[illegible]年

百各地借紙借を著す度葉羽
鄰聘使を印し へるの不便を云ふ徒
後の文書を収む、高麗ひびろ〜
ふを修理の為め大いに苦す

一 香林名家自著文稿 一冊

淺田宗伯 著に其の門流の漢方醫
法家の系統を言の也集めらるゝこと
宗伯の文多く、中村西亭のか
著と称あるこゝも二三あり、亦宗
他の他人の文稿に著をかへるもあり、
其日左の如し

岸田宗伯 森彫村
原 成庵 今村亮
小青蔵 福井隆林
淺田宗伯

法家皆香林に名彫あるし、あるも
とも漢法の高きことに文名の伝へ
らるるもの少き平あり、余も墨跡
の減ひんことを惜び特に整理し
て一冊とせり 名づけて香林名家
文稿と云ふ

十二月三十日

讀書

春興

銀章二顆

今日京師鑄

面の字指守敬

刻の字を取る

春城の象形鑄

者の意匠こゝ成

る

明和五年五月日

の南世花街淡義といふ五冊本あり也名のとゝゝ

なれと時のを淡ゝの初めて也、何人の著といふを

榛原蔵

詳かにせんと、日志道軒の流れを汲むもの、

戯作ゝ雅文お紙の文句もいりまじりこれとなし

てきまゝの雅文、莫きまゝの所花街の様子を、

俗名花街の内情を尽しもの也、

世書を写り不も)を刷る、往々解し難き言

葉あるはお南先生の古るきを採る、所く倣ふ

の巻名を云く

迷客方便坊　一冊

浅草雷門　二冊

浅草観音道　三冊

新造茶引　四冊

異主屋可名　五冊

新言塗義人 品第六

三類附書 第七

おもふに此菩薩、世尊を世換と書き、支那の
翻訳者を漢文にうつしたる僧とするの説、と
しるせども、花厳経を、
此世界に入る縁とし、余の経に
二三義千あるべしとを費(徒)とするべ

榛原製

東京製

榛原製

# 江差に於ける賴鴨厓

統計學社長　横山雅男

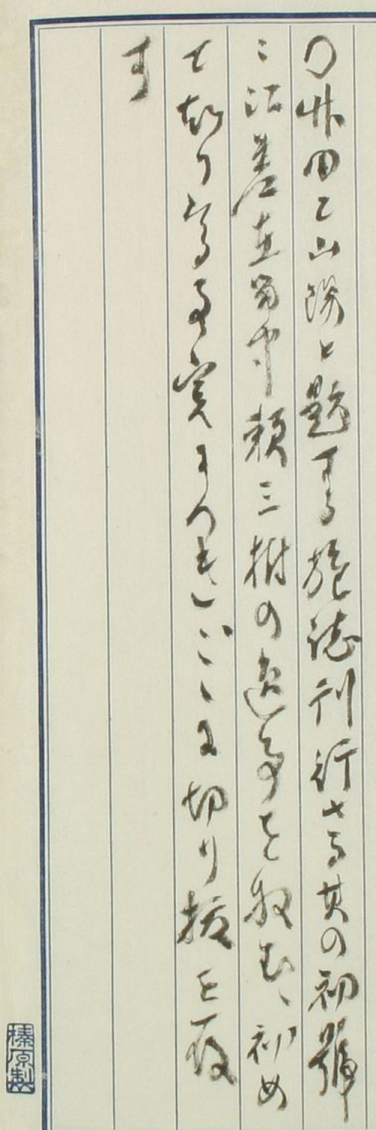
過日、木崎好尙君輯注の『賴山陽詩集』の出版その他に就いて、多大の盡力なされた岩永淳太郎君が弊廬を訪ほれ、近々『山陽と竹田』と題する册子が發行する筈であるから、拙稿を寄せよと乞はれた。私は此の美擧を贊し、新刊『賴山陽詩集』の讀後感を草せんと思ひしが、その後、次へ次へと、講演及急を要する起稿等のため、その約を果たすことを得ず。因て取り敢へず本稿を寄せる。蓋しその册子は特り山陽のみに止めず、廣く賴家一門の人々の事蹟をも收載する筈なれば、これにて聊か責を塞ぐことゝする。

* * *

大正壬戌の夏、私は宮尾北海道廳長官の依賴を受諾して、札幌・小樽・室蘭・釧路・函館の各市及根室町に於て統計講演をなしたが、江差町へも往つた。江差の五月は江戸にも無いと唄はれた程股賑であつた。同地鯡豐漁の頃は、累年檜山・磯志・奥尻・太櫓・瀨棚・久遠の六郡で、十五萬石乃至二十萬石を算したが、潮流の關係にや、明治三十二年以降は頓に減少した。道廳は之が挽回策として漁







港築造の起工式を擧げた日が、偶々私の滯在せる日であつたから、招かれて參席した處、記念のため來賓に扇子を贈られた。扇面には、次の如き鴨厓筆の江差八景詩が複寫されてあつた。

弘化午未之交。余流寓松前江刺港。々市正齋藤觀海。分港中八勝。與詩友命題賦詩。書二大額。揭之隆民殿。々所祀一港漁釣神之處也。夫松前以魚蝦爲米粟。漁釣之事實係二一島民命。而神司之所禱必應隆民二字。可謂不誣焉。觀海今揭額于此。亦所以禱二一港之隆盛一也。不然雖有八勝景誰樂而觀此哉。

弘化丁未夏五月　　平安　賴　醇　識

篠山曉雪　　賴　醇

篠山帶雪立洋空。掩映曉波藍碧中。江差江頭幾千戶。無恙不約白玲瓏。

法華寺霜鐘　　釋　日　袋

江山夜靜白鷗津。木末樓臺見瓦鱗。月色霜華無限冷。曉鐘敲起泊舟人。

鷗島煙檣　　西　川　雍

鷗洲波靜似瀟湘。多少舟船繫夕陽。日暮水天秋一色。淡煙薄霧罩連檣。

津花夜市　　本　多　覃



萬點燈光滿肆奢。網魚氷海換芳醇。輕々性命君休怪。便是三天二地人。

大淵遊鷗　　梁　瀨　存　愛

無數閑鷗伴軟霞。隨風浮氷了生涯。打魚人去夕陽闌。漾々波心是汝家。

愛宕觀瀾　　原　元　圭

朗嵐涉盡宕山巔。風捲洋心浪怒然。一望使吾詩膽落。狂瀾奔躍蹴青天。

乙浦漁火　　高　野　慊

朦朧片月夜山長。乙浦邨家晚渺茫。喜見今年海豐甚。漁燈萬點蕩波光。

澧橋涼月

館山映氷倒屠顏。橋檻迎涼日暮天。月出清波平如鏡。行人躡度碧峰巔。

私は、翌日わざ〳〵縣社姥神々社を參拜し、その序に鴨厓の筆せる一大額を見せて貰つたが、實に筆力遒健で珍らしい物と思つた、今は同社の寶什である。尙は、同地で得た逸話は、鴨厓が江差滯留中甚しい疥癬を病んでゐたのを、本多覃に治癒されたのを大に喜んで、謝狀と所藏の寫經文の一部を割愛して本多に贈つたことである。本多の後裔は現に函館にゐると聞いたから、最後講演の地たる函館で右品を一覽することを得た。私は參考のため岩崎同市助役へ依頼して、後日寫して貰

つた。即ち左の如くである。亦以て騷壇の佳話となすに足るであらう。

四〇

謝　狀

初余遊二松前一。手脚患二疥癬一。轉到二江刺一。時已十月。風慘雪虐。頓便二疥癬內陷一。氣急促迫。殆署二名字於鬼籍一。本多佐鄉藥レ之。騎レ歲駈二除一二豎一。死骨再肉矣。貲千金之報。不レ足二以謝一。然僕寒酸一書生。況流二落萬里外一。固無二乘レ鶴之資一。橐囊中唯有二紺紙金字古經一片紙一。蓋藤原清衡所レ納二中尊寺一。奇古偉品也。僕好古之癖。自以爲下一字直二千金一者上。分二截其三行一。聊以爲レ贈。佐鄉與レ余同レ癖者。佐鄉雖二神匕一也。恐不レ能レ醫二此癖一也。

弘化丁未初夏小盡

平安　賴　醇　識

金字古經三行紙片

七等覺支八聖道支實際相諸菩薩
摩訶薩如實了知而於中學於一切法如實了知略
廣之相善視元四念住際是名四念住實際

# 國寶百五十點を指定さる

## 始めて個人所有を主に

國寶保存委員會は舊臘十一、十二兩日文部省に於て委員會を開き審査を續行、十三日午前十時から總會を開催、細川委員長以下各委員卅氏出席最後の審査を行つた結果左の如く新國寶を可決十二時散會した。今回國寶に指定されたものは約百五十點の多數に及ぶが個人所有の寶物が國寶となつたのは今回が最初でかつて營利のために分賣して問題を惹き起した卅六人集の内本願寺に殘つたものは今回國寶に指定せられ今後轉賣譲渡する際は國家の承認を要することとなり分散する憂ひはなくなつた、且すでに分散した卅六人集に對しても追つて國寶の指定をする筈である。個人所有の寶物では刀劍が比較的多く繪畫、道具類も多數出た、可決された新國寶は左の如くである。

### 太刀類

◇杉山茂丸 東京)太刀、銘守次
◇伊記巳代治伯(東京 太刀、銘基近
◇加藤正治 東京)太刀、銘康次
◇篠崎都香佐(東京)短刀、銘鎌倉住人新藤五國光作永仁元年十月三日
◇大倉集古館 東京)短刀、銘則重
◇細川利文子(東京)太刀、銘熊野三所權現長光
◇小笠原長幹伯(東京)太刀、銘劇包
◇戸田氏共伯(東京)太刀、銘正恒
◇小此木光子(東京)短刀、銘國光
◇伊達興宗伯(東京)太刀、銘景秀
◇鳥津忠重公(東京)太刀、銘吉房
◇福島行信(東京 短刀、銘則重
◇前田利爲侯(東京)短刀、銘行光△短刀、銘高市□住金吾藤貞吉
□享四年甲子十月十八日△短刀、銘備州長船住長義平十五年五月日△短刀、銘來國光△太刀、銘來國次
◇土屋正直子(東京)太刀、銘守家造
◇小宮次郎(東京)太刀、銘國行
◇秋元春朝子(東京)刀、銘左兵衛尉藤原國吉
◇河瀬直作(兵庫縣 太刀、銘備前國長船住左近將監長光造
◇瀬澄之介(兵庫縣)刀、銘光包



◇酒井忠良伯(山形 太刀、銘信房作
◇嚴島神社(廣島)太刀、銘文永二年三月清綱

### 書畫道具

◇公爵近衛文麿(東京)紙本墨書御堂關白記(廿六卷)
◇公爵近衛文麿 東京)紙本墨書神樂和琴秘譜(一卷)
◇本願寺(京都)紙本墨書熊野懷紙(一卷)
◇公爵近衛文麿(東京(紙本墨書熊野懷紙 三幅)
◇男爵三井高精(東京)彩牋墨書古今集(二帳)
◇男爵大倉喜七郎(東京)彩牋墨書古今集序(一卷)
◇三井合名會社(東京)絹本著色虛空藏菩薩像(一幅)
◇三井合名會社(東京 絹本淡彩寒江獨釣圖(一幅)
◇粟山善四郎(東京)紙本淡彩布袋圖(一幅)
◇公爵毛利元昭(東京)紙本淡彩山水圖(一卷)
◇小泉策太郎(東京 木造聖觀音立像(一軀)
◇小泉策太郎(東京)木造愛染明王坐像(一 )
◇小泉策太郎 東京)木造騎獅文殊菩薩及脇侍像(五軀)△紙本墨書大唐三藏玄裝法師表啓(一卷)
◇侯爵黑田長成(東京)秃青磁花瓶(一口)
◇公爵九條道實(東京)紙本墨書延喜式(廿八卷)
◇大倉集古館(東京)木造騎象菩薩像(一軀)
◇根津嘉一郎(東京)紙本著色繪過去現在因果經(一卷)△絹本著色那智瀧圖(一幅)△金地色燕子花圖(一隻)
◇伯爵松平直亮(東京)紙本著色平治物語繪詞(一卷)△蝶蒔繪螺鈿手筥(一合)△玳皮盞(天目花碗一箇)△油滴天目茶碗(一箇)
◇伯爵酒井忠克(東京)紙本著色伴大納言繪詞(三卷)△油滴天目茶碗(一個)
◇男爵古河虎之助 東京 紙本墨書萬葉集(十四册)
◇子爵福岡秀猪(東京 紙本著色觀楓圖(一双)
◇保阪潤治(東京 紺紙金泥阿彌陀經
◇男爵岩崎久彌(東京)紙本墨書古文尚書(一卷)△紙本墨書日本書紀 二卷)
◇侯爵前田利爲(東京)紙本墨書日本書紀(四卷)
◇田中勘兵衛 京都 紙本墨書日本書紀 一卷)
◇男爵若崎久彌(東京 紙本墨書明惠上人歌集(一卷)
◇東京美術學校板繪著色辨才天梵 帝釋天四天王像(七面)△紙本著色繪過去現在因果經(一卷)△紙本墨書延喜五年觀世音寺資財帳(三卷)
◇原邦造(東京 紙本著色花下遊樂圖(一隻)△木造菩薩座像(一軀)△青磁花瓶(一口)
◇公爵三條公輝(東京)紙本墨書北山抄(一卷)
◇侯爵前田利爲(東京 紙本墨書仁和寺御室御物實錄(一卷)△紙本墨書古今集(二帳)△紙本墨書土佐日記(一帳)△紙本墨書寶恒經要品(一帙)△紙本墨書九條兼實佛舍利奉納願文(一卷)△紙本墨本王羲之戶牘(一卷)
◇公爵鳥津忠承(東京)絹本著色四季花鳥圖(一幅)
◇鹽原又策(東京)色繪鳳凰文樣壺(一口)△色繪芙蓉菊文樣皿(一枚)△青磁花瓶(一口)

◇子爵土屋正直(東京)鹽山蒔繪硯筥(一箇)
◇富岡益太郎(京都)紙本墨書唐王勃集(一卷)
◇上野精一(大阪)紙本墨書唐王勃集(一卷)
◇龍源院(京都)木造釋迦如來座像(一軀)
◇伯爵大谷光照(京都)彩牋墨書三十六人家集(三十七帖)
◇男爵藤田平太郎(大阪)紙本墨色法相宗秘事繪詞 十二卷)△紙本著色阿字義(一卷)△絹本著色十六羅漢目(十六幅)
◇上野精一(大阪 絹本著色山越阿彌陀目(一幅)△彩牋墨書法華經(一帳)△紙本墨書法華經(一卷)
◇小川睦之輔 大阪 紙本墨書金剛場陀羅尼經(一卷)
◇松本松藏(大阪)色繪花藏文樣壺(一口)
◇原富太郎(横濱)絹本著色孔雀明王像(一幅)△絹本著色 魔天像(一幅)△絹本著色一遍上人繪傳(一卷)
◇男爵川崎武之助(神戸 絹本著色千手觀音像(一幅)絹本著色 野王圖(一幅)△絹本著色寒山拾得同(二幅)
◇東大寺(奈良)銅鐘(一口)
◇雄山神社(富山)木造慈興上人座像(一軀)

## 建造物

◇護國寺本堂 東京府東京市小石川區音羽町護國寺境内
◇同寺月光殿 同寺境内
◇仁和寺二王門 京都府葛野郡花園村仁和寺境内
◇姫路城天守 國家所有兵庫縣姫路市本町
◇八幡宮本殿 愛知縣額田郡福岡町八幡宮境内
◇靈山寺仁王門 靜岡縣庵原郡高部村靈山寺境内
◇御上神社摂社若宮神社本殿 滋賀縣野州郡三上村御上神社境内
◇大笹原神社境内神社篠原神社本殿 同篠原村大笹原神社境内
◇若一王子神社本殿 長野縣北安曇郡大町若一王子神社境内
◇尾崎神社本殿 石川縣金澤市西町尾崎神社境内
◇同社中門及透塀 同社同社境内
◇同社拜殿及幣殿 同社同社境内
◇氣多神社本殿 富山縣射水郡伏木町氣多神社 同社境内
◇岡山城天守 東京府荏原郡大崎町侯爵池田宣政所有岡山縣岡山市山下
◇廣島城天守 國家所有廣島縣廣島市基町
◇福山城天守 國家所有同福山市三ノ丸町
◇大日堂 和歌山縣那賀郡鞆淵村大日堂境内

## 興味深き名蹟や珍什
## 新國寶の持ち味を觀る

右を概括すると、建造物十七件、寶物類九十一件となりそれと共に社寺建造物二十六件、社寺國寶二十九件に對し維持修地費として國庫から、補助金を交付される由。中に注目すべきは、個人所有新國寶の中の多數は讀賣新聞社の



名寶展などに出たものである事だ。特に繪卷物の王と云はれる酒井忠克伯藏の「伴大納言繪圖」が、始めて國寶に指定されたのは特に面白いと云へよう。惜しや、ボストン博物館に秘藏されて了つたものと對をなす平家物語繪詞(六波羅行幸卷)もまた新國寶として一段の光彩を添へる事となつた。

なほ、右表でも分るごとく、個人として最多數の國寶所持者となつたのは前田利爲候で實に十二點の多數、根津嘉一郎氏藏「那智の瀧圖」や有名な「燕子花」圖の國寶に推されたのも當然である。八百善栗山氏藏の布袋も一際引立つたわけで、美術學校にも國寶が大分出來た。小泉策太郎氏が政界に馳驅しる中に佛像で堂々たる國寶數點を蒐められたも異とすべきだ。

東京では小石川の護國寺と月光殿が先づ擧げられる、この本堂は元祿十年幕府の命で正月起工され七月竣工したといふ建築工程では高速度のもので淺草觀音堂と共にこの種の大建築である、月光殿には近江の圓城寺の中にあつた書院で明治廿六年原六郎氏が買ひとつて品川御殿山に移したもの、昭和二年に護國寺に寄進した、江戸の町が出來上る前の桃山時代のもので書院造りとしては珍しい。

京都仁和寺の仁王門は樓門としては日本第一、太守のうち姫路城のは學名からいふと復合天守といふもので現在殘つてゐるものではその比がない、同じ天守でも岡山戒、廣島城、福山城の三つは池田宣政侯の所有、今時お城を三つも持つてゐたなどとは一寸ナンセスだ。

福山城は外部に鋼鐵を張つた最新式のもので元和五年幕府の築城禁止後に完成したもの。

長野縣北安曇郡大町にある若一王子神社本殿は規模は小だがデサインはグロテスクのもので恐らくグロテスク建築の元祖だらうといふ。

典籍の中では誰でも知つてゐる紙本墨書御堂關白記(近衞公藏)紙本黑書延喜式(九條道實公)藏などの有名なもの

兵衞氏の三氏のが揃つて國寶になつた。

蒐葉集の最古のものといはれてゐるいはゆる元暦萬葉集十四卷(古河虎之助男藏)もまた國寶になつて一際光つた。

陶磁器では松平直亮伯所藏の玳皮盞、油滴天目茶碗と酒井忠克伯の油滴天目茶碗(付桑漆天目台三ケ)が目立つ、仁清作では鹽原又策氏と松本松藏氏のが指定された、二つとも甲乙を付けられない名品である。

○今朝の東京日日新聞に太のことを書いた橋の図が出てゐた。橋は硝子を支柱を表象することもある。大震災後の東京市は橋を次つて造らねばならぬ。久しい間日本は食物を橋の下有者ひかつた。度々水害が出る。彩色を揮つてある通橋は美を揮はるる。橋の美は木橋にあること云ふまでもない。日本の如き柔の一要素である。赤し橋も風景味のある景色は木橋が安平な調和を保つかも知れない。橋は橋が架されたと云ふ風景がメチヤクチヤ百年の昔と云ふ風流がある。必竟調和を結ぶからの事は家が木造である日本は橋は木造ならば宜しく自然と云ふてよい。赤かし橋は

西部アフリカの吊橋

西部アフリカの土人はツルを藤の物植物を呼ぶ「ーヤジ」と呼ぶ。千萬危険はに者ぬれ剛る渡で氣平氣で渡る。集めて作つたこの種の吊橋

榛原製

堅牢で無い危険がある。大形列車は通ることが出来ない。重量を増すことが無い。電車の通ることのない今の世では用を為さない。永久性のものが無い。然るに鉄道は金をかけることが無い。木橋は北海道の如き森林地帯にあるもの、堅牢の架橋を見ること能はず。風致を損する傾向のものである。コンクリートもよい。鉄骨は設計が出来る。橋の美は四国の風景に調和し、風景に美を添ずることが出来ない。材料の如何は問題である。

橋の模式や程数を表示した我邦に於ても稚拙である。

標原制

然別の高く長くかけた吊橋もあれば、船を鎖で繋いだ船橋もある。木の桁の上に敷板を並べた板橋もあれば、土を置いた土橋もある。穿穴隧形をなした錦帯橋の如きものもあれば、太鼓の胴の半径、状をなす太鼓橋もある。日光の桁けるまの如く漆を塗つたのもあれば、鎖で高く吊り上げた自在に撓ることの出来るのもある。西洋技術が入つて以来、所謂る眼鏡式の石橋もあちらこちらに見られる。今日では人の通らない橋もいろいろある。鉄道専用の橋、道路を通ずる橋の如き場合、人の通行を許さない橋である。帆船通過の川を渡れば機械の応用で橋の一部を吊り上げ得る橋もある。

橋を就てのエピソードとしてものがたり（すぐれる）話の数多敵を決とする、橋をこぼつことも多くあつた。大井川や天龍川などの出水の人が橋に代用さん姿を肩上に負ひ乗りこなすことあつた。大阪のごとき大小の橋の多い所だに人物番付を大小の橋に比しも月並すやうなこともあつた。夏時橋を納涼の家とした、今日も橋の家々で天出した所を作りまんを涼亭と名へ居もある、京都の時代に架してある橋でない涼棚を心つて客を迎へたこともあつた。橋へ納涼の家とてよいのもひとく用を賞するも好適の家とまんた

橋原製



橋

天橋

擬橋

安藤の長崎神社などは海中に浮んだ構造であんまるもの、日本橋の真人中を芸者山と谷文晁が初めて解説し、文晁らしく都をかけ、あなたこなたと、仰せのとおりだが、西に描めん待を蹴さんだ逆しもはうとも。橋が生きて落命者の投身の示に用へられ、えんでいろいろのロマンスも残さん

△一橋は必らずしも石上に架さるゝものにあらず。神社仏閣などの前から、殿堂を繋く巷あるを橋が架されたまゝが常態となつてゐる。今日だはどこの停車場(東京駅)の上を架した橋がある。亦京架橋(道)も都市の橋と見るべきものだ、橋下を倉庫が建来りてゐる

南欧が開かんとしてゐる

橋は風景と趣味とを深くするまれから、画家や詩人を喜ばんとするが、世界を股にかけて忘れく往来してゐる人が各国の橋を数味ぬと見て色々の説をなしてゐるものは甚だ少くない。遠藤家は其の親族

上海(支)に就て研究してゐるが、Bさんは数味の問題だのもの。自分等は外国を足を踏みあるいてゐるうち外に方法もないが、人の言いたいことを言はんとする人が各国の橋を無味ここに渡田を陵といふ人が各国の橋を数味を持ち、大正十四年の頃大阪朝日新聞に其の所見を書いたことがあるが、それが一冊の本を印刷されたのを手に入れたので、初めて各国の橋をいることを得た。北海道の言ふ所を信ずるを西洋諸国の有名なる古い橋は抵抗羅馬の窓(道)つたものだ、羅馬にそれが復活とかなる石のすのみならず市時庭部でもあるが佛国西班牙でも有名なる数模の跡を拾ひ(支)

に於ても望年の路に於ても注目すべきものである。羅馬人は橋梁の名人、架橋の天才だといふてゐる。昔しの橋梁は河を渡る交通の目的のみの種々の副作用があつた。則ち一二を挙ぐれば要塞の用を供したことがあり、宗教の象徴に伴ふて橋を礼拝の対象としたことがあり、橋を利用して上に家屋を設けたことがあり、田舎にもあり、或は店舗を設けたこともあり、田舎にもあり、或は小屋と橋と連結させたこともあり、陸つて橋の様式や其の装飾にもそれぞれ異つた点がありて其の時代々を現はしたものである。中世紀まは伊太利から橋梁傳来橋のことを大活動をやつたのである。それによりて往事さまれたものは少なくとも

と云はれてゐる。日本も同じことが、交通史上に宗教家の努力は決して少きものがある。

此の小冊子は世界の名橋の図解を出来るだけ名橋の名称などを一々挙げるも及ばざるも、先づ南橋の上に橋詰があつて、礼拝堂があつて、店舗があつて、式は今日の如き無窮の都市の利便を用の出来ることが、表示して史的に見ればそこに興味が湧く、建築家らしく、建築家らしく、教味家の話が自分に興味のあるのは故である。

○淺間山に天狗の麦飯と云ふことがあり又仙物の方諸附りに日の味噌山といふ長者味噌と云ふがあるこれは共に植物の破壊力を示す好標である。全体植物の破壊作用があることもあるが根の力で石を壁しかり割つたりすることもあるが根から出る花を溶かす酸液を出すのでその力が馬鹿にならぬものである。植物が枯死すれば、そのあとの働きも根からさらいと思ふのは間違ひである。芋根から腐植酸と云ふ一種の酸液を生じ、その根が出る花を崩す力をもつてゐる。麦の麦飯とか日本味噌などと云ふものは偶に生えるかびの一種が火山岩に生じ、その岩を

分解することを強くするのである。岩を崩してあるのである。天狗の麦飯は山石をボロボロに分解しとしたものである。麦粒のことを含めば麦飯の名から麦を共味噌も溶石と分解して麦味噌の名がある。味噌は麦粒のことを指すのである。天狗の麦飯とは麦粒のことを指すのである。

○日本の坂の高い所の田畑は肥料が流出しても実に有効である。旱地で一旦肥料を施すと数年も保つものである。ハ方ふ多くの肥料が今河や海の侵蝕作用のように土壌を崩れて土壌とともに流れ去れて

ある作物の海藻などが一一ふる運びをなしたる
分量はどんなふうであるかと云ふと、作物が美を
尽すまでもなく河の海のまゝ美しくなる分量
の方が二十倍も多いと云ひ、アメリカ合衆国で調べられた所によると四倍かけ
ばいうまでも失のない肥料分の毎年金額と又移
つて約四億円以上に及び、その流失する土壌の
分量は約十億とんの達することは、私の
働きも実に大なるべし、私の侵蝕作用も
甚だのことときこゑも遠くと割り出つてあるこの
比かうまんが目まいはいまのけんぶつも流るゝ地の
心力で遠く後ずさりをする、米国の調べる依

榛原製

るとナイヤガラ瀑布でも侵蝕の力を一方
年に尺を一尺から二尺位つゝ後ずさりしてゐる
ことは、日本の著名の流れもあるも
ずさりしてゐるは勿論のこと、（今井博士中
の山と河）に拠る。

○富○山登攀記を読むと、往々花畑のうつくし
さが書かれてゐる。自分は富山と登つた経験があるけ
れども自分の登つた山でも個所のものは無つた。多
道のもの家の言ふ所によれば、北の最初のある所は草
本帯と唱ふるゾーンで、大概一番人の通る道
さとなるとある。偖し其高さに達する限
りの。現在富士まんが無いの北のゾーンを指

して一層高い所に高い地衣類のように生えることもあり
地衣帶と云ふてゐる。葉蘚を高いず高生植物
して花を咲かせる植物は草本帶のものの八分ニフ
ト」であらう。その差は皆な無いが花の色は五
彩さまざまで光から花瓣を布いたことく美
山岳を毎年毎年繰返して無限に生ずる。
家の高山帶に接する北の植物も生ず高山植生
と混生の二種があり、岩石や砂地の日向の蘚
の乏しい所に生ずるのは混地に生ずるのより発
育が悪いと云ふてある。高山地方を流れる
地方にまた雪が融ける頃流れ込んだりして植
物を育てるまい。大地の多段をなす、殊に植物植

標原製

物が自然死滅するので、温帯生の北等高山植
物は丈も高くひろとして花も大きく色もよいと云
ふことだ。北の花白い日本アルプスの特有山に多
くやはり白馬山は北の花を始めも高山植物
雪の下に早く芽ぐみ、夏が来ると直ちに花を
ひらくと云ふが、なるほど植物はある。実十
種の高等植物を学者が調べたことも一寸と云ふべきだ。植物の名が附いてあること
し人跡の印らぬ所に花もある。完全に苔
は花でもあるまい、果して本草家がつけ
たものか本草家がつけ
たものか。

○前に橋と就て思ひ寄りを書いたが高浪氏らに此
との一二を補記すると、信州の御山獄山に登る
所に蜀の桟道が別くもあらうかと老僧さん
る桟道が山の林麓に曲折して架してある。それは
道の下に桁がある。つとも上に葉るが置かれてあ
つとやうに記臨する。桟道も実に橋の一種ひあ
る。ひとり北京ばかりでなく。渓間と山道とを
富う雖い所もすくなくない。北陸の桟道式の架橋
がある。橋の風致と就ても差錯保し、一橋も
色くんに他の一橋が別の方向に折り曲つて掛
新傾的に出来てあるとの用直線の美術
のこのようにも風致がある。大阪の如き橋のまい

榛原製

まい自然養差の橋が地形から生んでもあるを風致を
そもあるの。橋の中頃から陸中の陸こつるが
る所もおもしろい。幾谷に接く所なども一例で
ある。並子花の名所と云へば所に橋が養差
錯綜して通を添くれが、今も見が残つてもあ
る。芝の公園中の徳川家の廟所のある樂
林中をおすると、橋が縦横におもしろく架して
あるのは興を感する。天造物で橋と擬さるべき
ものも日本にもあるにはあるが。洞つの形をなれ出来不
の上を渡する地形を拵たいこんが擬橋である。天の橋
立は潮流が両側から砂を掬み上げて自然に二條
の砂洲をなしたものであるが、まこと天橋の名がある

通り擬橋の好例である。ある詩人は天の橋立の名の雅致を鉄くと云ひて、沙線と名を命じたるなどは莫かれ（の沙時代である。天橋と云ふ方が妙なる雅趣を合理的でもあるが、なほ論ずるまでもなからう。）

の義山の山奥白雪山中、岩壁の直立する渓谷に多少の河陽があつて、三ッの橋の如くなつてゐるものが彫まる所に匂匂して一方より他方へ通ず板はる洞窟がある。これを土人は三橋船内潜りと云ふ。これも擬橋の一例となすことが出来よう。光琳如の画家に表はる橋は八つ橋だが、浴世絵家は甲物の様橋を好んで画いた。貴重や北斎画いたる名橋を描く

標原制

此橋のうち橋脚のないものが岩壁が高く双方より突出して、橋から下瞰すると神こは絶壁を俗すると云ふの深い碧潭の有る地形がおもしろいのである。天竺と虹を描くのも画家の巧手である。虹も擬橋とする得るかもしれない。

二十四

元来橋を思ふに、実橋であるが、いくらかある。山に遊りて結構された神社の歩廊などは、所々に析を支へられて、結構は全く橋である。西京の清水の寺の歩廊などが、元来、そもそもは橋が殿舎と混融一とする建築法と見るべきである。橋に付きまの述懐があつたことは言ふまでもない。一つ思ひ出

一説のハ高野山の奥の陰にある大きくもろい橋がやうまくい橋ひ、田舎の悪悪の深いものが落ると必ずす怪我をすると、昔から云ひ伝へられる。豊太閤のおき（高麗）高麗陣でも此橋を無事に渡り得るか否かに臨兼を催したと云へ。多くの武士を伴へられて此橋を渡つたが無事に渡つたのに、あの無邪気な人は此から、霧が流れ流よ気をつけろ、吾れ多くの人を殺したるも天の罰家の者のなるこのなかに佛の名を唱へる者は此橋を渡つたことが記録に出てゐる。

永井柳太郎がオリンピック大会の事を学びに来た士の学生の礼儀であることを語られ中を一夜四五の連中が行くに乗じ掃つた跡を粗砕きめて海石を海へ投げ築設を取り掛つたと云ふが学生が貴族や資産家であるだけの自力で架設する所におもしろ味がある。利慶日本人の生の及び雑いものである。日本でいい成れる橋を焚いた例はないやうである。沖縄人が日露戦争の初頭と日志と共に俄然奮起して蒙古の地に踏み入り露国の軍隊を制圧（阻止）すると共に紙橋を破壊したるとハ日本人にとつてこれ有名の運動

とて咳倚さんをみると、妻仰山紙後を誤つて
九思想から桜井集一味を流して金をもらえしこ
とがある。

橋を就てもうく エピソードがある。実だが誤り思ひ出せる
いい 橋の渡り初めを就て一事思ひ出すことがある
の天満の橋の開橋式の時に、時の建設部長が
金屏風を橋の中央に飾らんとして大阪市一の高
豪清の池と偽りやつたら、無いと云つて断り
つた、金屏の一双位がなんの高豪に無い筈はない
いと怒つたが、断あつて取消へて見ると、金紙の屏
風はいくらもあるが、純金の屏風は唯一集さくな
いので断つたとなん。回らうも清の池の偉さが

横原製

知れたと云ふ事である。橋を跨んでいるが因みの話
エピソードだ。京都の五條橋がある橋をするの
エピソードは義経が牛若丸と云つた時代并
若と橋上に戦つた、あの強盗の傳を紹服
したとこのハ伝世絵の絵の働きで橋ま
で有名となつてゐるが、男子の墓である時代産
形の牛若が男色家の表象、嗜好に投じた
のは死者を名誉い表象云ふとうつたとい橋の
幸とまつきこの三條の橋を勤王の士高山彦
九郎が跪いて九拝を拝してから、三條の橋を
エピソードが出来、橋本雅邦があるを金書
生を書いを即まして、橋を下に跪いて

つる人物を画して無くてはの、青山彦九郎を画
林とし、ことくくそれぞれ、其人物を合書生
が自家橋をと哀をとゝの表を寫しのいたあ
るるとハ、橋に就ての興味あるエピソードと云ふ
ことが出来ます。
以上書き終る業務に使ふ数冊中畑中徳
三著「名橋巡り」一冊を得て始る。明治四十九
月の出版に係る。一二此書に依り余の業の及ハ
ざりし所を補足す
浪華の錦繍巻橋差の事例ハ四ツ橋
北橋と就て云
西横堀上繁橋、下繁橋、去堀に去る

榛原製

風橋、炭屋風橋あり之を合せて四ツ橋と云ふ
二流十文字を成して橋を四方に架する
エピソードの一二を補へば
三河の矢矧橋ハ昔し東海道第一の長
橋と称せられ、北の郷と金言寺あり
其女浄瑠璃姫と云ふが牛若丸奥州に下る
時一夜の契を結ひ再会を約して別れんとす
るに臨み来たりし張り川に
投じて死し給ひ侍めの冷え悲んで尾と云ふ
白拍の道名を変じて阿波局と称し
寺と称す、此局の浄瑠璃祇園

十二ぬいこんを敷布ってくること
橋まんの宗教：俗人と工ピソードが多い、日本
最古の橋と称せられる宇治橋の新碑まん
衆生を済度の旨が刻されてある。また
橋寺と云ふ寺も今も存してそこ
に新碑が建てられてある。
名古屋の熱田橋の事が
女子の敬死を悼んで世話橋のことを
入架けも記新橋とあるその擬
寶珠を後光文書あれも
渡ると、此方きつけとるの公仏
設くと行人：呼びかけてある

駿河の白子町と田の為めに子が架し
た橋がある。まんをいつはりの橋と呼
ぶ深いていきて此かけを頼まれ霊の
自を死しての後の偽りの「はし」と云
ふ和歌から命日に此歌子が遠方、稼
きに出て、漸やくゆつてまること田が此
人にみる此の歌、稼ぎ溜めの此金で架し此
橋と云ふんをみる
橋の擬寶珠：新かけする橋習き
あちらこちらにあるある。文化頃の江
戸神仏新寺重修記に、東橋日本
橋のうんかん、北側のまんなかにあるき

はらへに、荒縄をゆひつけ、頸廣の
部うけをする。流すこと神のあり
方度の時、ちまた(巷)の間に茶をひん
て、こんをそゝきかけ、まくしかのぎ
はらへに悪(けがれ)をうつす、とする
四谷の鍛橋麻布の笄橋いつれも頸
廣又は首に咳の部うけする、沐浴の
の橋なども部うけする。糞餅をかた
川に流して上巳の厄をはらふ祈ことあり
屋蓋のある橋は珍らしくなく、神社
仏閣にあるも多し。殿を通る橋は
四大抵屋蓋がある。北の様式の橋で

有名なのは豊前の宇佐神宮の西の
参道にある呉橋、摂津の金刀比
羅の参道を横切する鞠橋。西
京東福寺境内の通天橋などで
ある。
茶蔓などで橋を架することは山間
の僻地に今でも見ることが出来る。
橋巡りの内に、阿波の祖谷村の
蔓橋の鐵造法が出てゐる。いくつも
ある北屋敷の橋の中で最も大なる
は長橋で長サ三十三間幅四尺
渓谷の両面に高きこと十八丈

丈夫造りの法は長さ五尺の丸太と二つ割とを
夢を或條も糾ひて組とし、布を敷るる。
此くる編み、編目を五六寸四方に拵へ、凡
を通はせも、橋の揺んさらやうに、橋の左
右まは、同じ夢を糾ひて欄干を作り、面
崖の突出し所に等け渡し、樹木の
根に緊着け、其樹根と蜘蛛の如く或條とを夢
と、蜘蛛の巣の如く或條とを夢
を橋を拵ひ掛けたるなり。之と
日本の庭は自然の風景を縮めて日比谷出す段向ひ
西洋庭園とは云へ或を異まする所あり、隨つて
庭の池や河海に架する橋もさまざまあつた。於て

複原製

も大きな橋不二架せんとするの擬つ
もあるから、よくこれを見れば大きな庭のようなもの
花の自橋があるまりを園芸家によつて殊の命
名がされ、まんまるを色り名とするもの
に、並べ多くがあれば、そこれハの橋が架してあり、庭中
の社殿が多つ寺表でもあつたりして前に流れが
あれば、まんに石橋を架するのも神社境内の橋に
擬するのである。築山の間や深い谷間に多くの
所まは橋杭を用ひるのに但生し杵で支へ、甲州の
猿橋に擬しやうる橋を架するこんを但生橋
と称する。嵯峨橋と呼ぶるの海に擬らへた面白
架する橋び掛(多)は昔と同じてある。田舎(多)

る流れる小流には土橋を架す、これは橋桁の端に縄巻き丸太杭を打付け両方の縁に芝を植あるが通例でこれを柴太橋と呼くこともある。岸の高く広い溝川などには二枚の板を架し巻き延橋と呼くこともある、或は同じ板を幅広く切り刻み桁の上に列べたものもあるこれを連尺橋といふこともある。或は二枚の板の代りに一枚の板を渡して橋とすることもあるこれを桁橋と称してゐる。又池底吐口などの狭い所には舟底板などを用ひて一形に架することもあるこれを汐見橋と名づけてゐる。大池のある所には舟橋を設けることもあり、渓流の激しい所には鉄索を張りて橋

榛原製

とし、橋上の渕ともなるべきもの、あり、端の高直が教さえ其の巧拙は国治蓄積家の手腕色の試金石とみつるものなるがこれは人の解し難きことである。

天宝二後年の高いビルデングの甲乙を連絡する為め屋上頭に橋を架することが往々あるこれは日本にも大きな工場などにこれを見る。此の橋は名高いのは伊太利の歌きの橋である。ウエニスの市内を流る運河を夫れで西岸に有名な牢獄の官邸がある東岸には有名な牢獄がある、これを連絡するなれば高く架されし屋蓋の橋が即ち此の異

橋の名のある橋がある、何故斯る名があるかと云ふ
紙中の図人が此の橋を通つて絵巻の法庭に進
導する、ところが此刑の宣告を受け刑場に送る
のであるから、新らしい橋の名があるのだ、詩人らしさ
る此の道河に舟に掉し橋下を通るハ感慨
え新んちいうもの無いのだ。

一月七の録

○甲州街道の絵図に大月駅とあるがある時
年の富士五湖めぐりの帰りさ初めて北駅から
汽車に乗り右に眺めつゝ。北駅は渓谷美と名
高い猿橋駅に隣つてゐる。北駅で
注意を惹いたのは、ステーションの構造の甚だし
異風である点である。日本のステーションは大

榛原製

小の差はあるが全部略る同じ様式に出
来てゐるが、北駅のハ丸太引割の木材を用
ひてゐる。高山のキヤンプの如き結構である。北の
様式は家面無しの田舎の家屋に擬した
ものと丸太の久原屋に擬した
こ而して立てられたものの別荘内又六中山
御殿大知摸のものであり、又張り丸太、細工び
野仮素朴の家に却つて面白味がある。空ひも家
根でも丸太つくりでよく油かが取んでゐる。歩廊ハ
到る所異なる所も無つたが、屋基を支へてゐる礎石
を陣祝まで廃物を利用されてゐる様体
此の改札口も流石に一社の家があつて、善き)ハ木

造「形の線を設けてあるが、こいつはコンクリートで花を
こぼ固めたようなもの、人を庶きる所があり、二條の人を
通す所があるが、そこで改札をするこんなどこか外
国の型に則ったものでもあらうか、どこのステーションの
撮造ぶりも苟簡一律で、統一を破って一種
しめっぽくて無いのは、こいつは、自分の北のステーションを見ても、
の工風のあるのは何故ひあらうか、どんな技術の
設計でもあらうか、自分の北のステーションを見ても、
変有的の統一の甚だ無数味ひもあり、面白い場合
もあり不統一的でもあることを感じ、北の大門駅の
ことく地方くさいローカルの存するステー
シヨンを作るべきだと思った。石材と高人ひみる所へ

榛原製

石を用いることが経済ひもあらう。米に高ひみる
所の米を用へるかよかろう、休憩室の設備でも
便利ひさくあんば、どんなに変化があっても差支
ないはずである。こんな就を思ひたるのは獨逸の駅
豆に成った支那の古蹟を踏まるいろくの建物を見
た際のことである。ちょうど石材の量産の高で
あるけれど、どんな家でも皆石を用ひて、公園でも曝露でも一つ高
高遠い家を拵へひ、
遠を編成した中の一つも無のは、流石に獨逸
あるのは技術の頭に偉いものと感服させた。
然日本のステーションでも一概に統一に拘
泥しないとはいえ地方くさきを地方色を

現いして話あの風味を生ずることが出来ようとのこと

○偕老同穴といふ語を珍婦の伝説として食ふことの語であるが、これが一種の動生物の名であることを知らざりしなり。英語ではこれを「花瓶」と命してあるところ、日本の名も珍ちらしの名といふこと。唯だ偕老の名をとり、実の生物を名とせざるは、実体を言ひ現はさい雅なるもの。全体此の生物は海綿である。其形は竹筒状をなしたる瓶のやうなるものであるから、英語にいふ瓶といふのである。海綿を(善き)浴物として用ひるこの

榛原製

が軟らかいフワフワしてゐるが、なかなか軟らかい部分でもある。硅質海綿全体の形を具してゐるもの。硅質海綿でもあるもの骨格を形成してゐる針骨が硬く且つ尖つてゐるので注意を拂はねばならぬ。硅質海綿の石灰質角質と云ふ種類もある。この生物は我邦の相模灘の名産で、三浦半島に採れるやうになつたのは二十年ほどの事である。二百尋三百尋の深さに存在するのを採集が容易でないこと、西羅巴などに無つたのが、十年程前ノルウェーあたりで採つたことが伝はつたらしい。これがお市の白色日比喜

龍に見くつ、海苔が自然と此の岩の間を通つて
いろ〳〵養分も交つて生息するのであるが
海苔の小さなものも亦の流るゝ潮に此の
中へ入り込み、さて入り込んで成長する全
く面白いからそこに毒虫もあるから、そこに海綿
海綿の食餌となるものが多く、この海さんも這入
つてまゐると日上は前と例なれば生長す
ると、此西は圓んびりあるる構針のやうな網目
から脱出の出来るのであり、利益
そこを永住の所となるのである。さんが石の義
雄雄一對が多くの場合一所にあるる所
から、偽光同穴」の名も生じてくるのであるが福

榛原製

岡や下の浜あたりでは入い前からこんを生出れいよ
とも結婚の儀式をこゝに見られ裝飾に用へられる
ことと少へれ。

○日本人は外国人の驚きとする藝術がある。国
沿、華道、盆景、盆栽などは、日本固有の藝術
であるが、外人は日本の婦人に花を活けることを教
科とも教へると少分なるとの顔をして驚
くく、西洋の婦人は庭から草花を摘み来つて毎
雑花さんを花生に挿しこんで、さんも美人ひの
さまを習慣から考へたらめて感ずるかも知れん人
別して花を瓶に挿すこときは簡単な作用を
藝術呼ばりをするをおかしいと思ふあるひん

が実いろう間単でいろう。挿花がもっぱら研究さん
工夫さん、さんがいろいろの流派を生んでくるこれは歴
史がある。華道の或る派は、擬工に流れ
て不自然に陥ち俗に流れて忘味を感ぜしむる
ものもあるけれども、本来華道のい自然を能
くするものであって、樹や草や花を四囲の生して
ある自然のまゝで、且つ趣味ある姿態を選
ぶのが華道の本体で、特に折り曲げ刈り切って
り溶くなりして形を心ゆるのではない。生利活の華
道の本を読んで見ると、小枝一本でも切ることを許
さないとかやうな書がある。瓶に挿した
花の姿態は、小さくこそあれ、自然そのまゝで

榛原製

あり、斯くあるべきはずのものである。
花木を折り曲げ素りなどせず
ばならぬが自然で雑化もなく、ことのやうであるが挿
して姿態のよくそなへるのを選ぶことが決して
無雑化で出来るものである。流派を作ってい
るの鉄を入れることが許されるとか、賛枝を
ちょうど、入るきれを除いなどする。偉
かれ一ト鉄みこの鉄みを入れてはかうで、元もあやう
い姿態が美化するに過ぎず華道の義術があ
るのに、小さいものを大木のやうに見せることは、
業の華を飾く術の特長の美術の園
華と偏する。細い枝を多く寄せて巧みな姿勢

を心ることも花や葉の内勢を保ち、枝ぶりを
窓ぶりに、枝を支ることが畫のごとく或る云味
を枝を畫くことも自由に創いこと多つるしい、右は貫
上れ花や葉の蕾を描くことも非常の其心が要
る。[illegible]木[illegible]や草[illegible]も畫[illegible]
同じこと花、特神的のこの花と其道の人は言ふ
特神の板付に畫は拙作さし
が華を挿むも完全の特神が現はれず死華
と言ふのも藝術上南北のすがあるがこ
人きことは恐くく外人理解されるべひあら
う。

盆栽を心ることも華道と似ひやうなこと
が

えへ根付びありて、永久性のものであるから、越味
は挿花ほどの上びうまく心ることが決して
容易ひなひ。地境と杉とも自然を範とするひ
出来得べくんば全然自然のまゝのものを取り来り
其侭鉢に植つて坐玩に供するのが最上である。
例へば高く聳える巨木である杉桧の姿勢
の大木を似て模すもまた
移しも樂しむのは
この盆を尋ねることは
まるも危険がある。
のとく整つて其侭中分の
栽家の野生のものを取り来り、二年乃三年乃其心

して育てあげる。其の植物に於ては土質も考へ
なければならぬ。紀州に選ぶ盆栽の約束
は小さくても大樹の姿を備へてゐなければならぬ。
培養も苦心して大きくするやうにしなければならぬ。
漢書の枯木竹石のやうに、老樹の趣を表
はすもの、或は雷電に撃たれた人工的の樹木の癒を表はすものなどさまざまの意匠がある。
のであるが、樹木の方法と伝らねばならぬ。樹木を植ゑる術が
あり根のたとへいろいろの方法があつて、其の
結果はなほ深山幽谷にあるやうな風情のあが生ずる。盆栽の得意がこの

榛原製

此所にあるのである。植ゑられんが藝術である。
よく考へが成りたつてゐる。山河をおもはせる姿
盆の大樹を見ることがあり得る。或は深山幽谷の
景色を築の利いた樹を見ることがあるし、
ちゃんとした樹を庭の
と云はれる美を貴つてくることも出来る。
えば人の人も黄昏の風景を見ることが、盆栽家
は十分考へることをこゝにアチエアに供給せんとす
ることである。尺の間に置いて味又且つ玩ばれる
ものである。盆が一種の藝術
となることは行はれるであらうか、或は個人の修養を
することを自然に換ふることとして排除せんとするものも

るが、どうせ人間の用に供するべき材木の生地に従って人間を役立つやうにせねばならぬ。大和の杉を樽材にするべき赤味の酒の行はれた時は、赤黒の色の材を青ぬるべき保しき赤色の酒が流行せんとするんの丈赤味を樽から去る者が悟巻上起る。唯此自然ハ多くハ、さして現こるんが行はれもする。唯此自然多くハ任して置けば、優勝劣敗で、多くの材こ産をもるんを枯死するものもあるが、ものを見るに、多くハ保護しその姿を変ずるを草や動もまんべん材木こ花業をなさせるとして人間の役味を投じて、とすることが自分の故に自然を変ずると云へ得るやうの、多くの義を術い大自然を養ふものである。

榛原製

ることを思ふと、なほ乳の家の芸術も下に置けるの貧者のものもある。彼等の性質うして大自然の缺陷を補ひ一層美化することとするやうをしてこれも外人の理解し難き義術である。

盆景を作ることは日本のみに行はれた一種の義術とするべき、盤上景の盆上に景を生じるこの定を作ることは略ぼ同じやうなものがこれも室内の大自然の模型を現出するこの本年の歌の題が社頭雪とすることも義を盤上に出すのやうに出すのである。盆景の白沙を用へて流れを作るのが例とされてある。雪景ならば白沙が最も適当と用ひられる。これも自然が貴いん業

石なども泥土に心のにくらしく実物のが重人せらんとみる
る、近来外国の式とかひ、連山の奇巒なる形貌を
泥土に作り造出て彩色をかくしたるものがある、
寄宝八宝宝れが、盆栽家い似ちれ之のを
排作したるもの。盆石家の集こぶ石の即ち大器玩
石家の玉石ふ石で、他物の大兵石、甲物の異仙峡
の油石、時の石、鞍馬石ちどが珍重さん、春の景
色を緑石夏の景色の里色秋い赤石冬を
八白石が活きて用へらるけれども、実い景色
を造ひ造態がよけれども丸ふ形も拘泥すると
反かちいと思はれる、盆景家磯屋友吉と云人
の古いとちから教くらんの所が郷国城後

榛原製

の鉢ヶ浦の石が盆景の用と日立つと思ひ掘搦さん
てある、鉢ヶ浦と云ふ所い自分い行ちたいがこゝ
竜甲石牡丹石などがあり、又い新崖から海を入
つて久しく波浪ともまん、海岸に打寄せられもの
ど貝形と珍重捨て難いとあるとてある
が他の景物で見たいと思ふてある。又い宝も用
もとも寄石ぼを山と擬らひたり式の海と擬らう
なりして、多組合せたりとでいろくの風景が出来
る。仍海大体或る仮景の板を富士の宝宝
の風景画とい四一から出る所がある。九も土を用ひ
て樹木などをあしらふものあるが、これい雅趣
宝宝ひ、四或い樹園八家などを置き或の天幕

を使ひ分け橋梁を架し分け船を浮べ分けすべんハ白河で越を此るのもも複雑といふが往々体に隔りやすの難がある。私ども幼り盆景を長ハるへが、無邪で云へば夏はまへまへのことである。きく手入がおびただしいつもや人から生きたんれものも今ハ樹が枯死しも仕まつれ。保し人を抜く盆の世変の装飾に共変人の御国の湾りとする風景盆とくい花物の感覚や木蔭のラインをも盆景に必つて互くことハ氣の利いた接待法ひ方を表ハもる変向ひあるを抜面するの。要するもこんも大自然を模倣しも ミミアテユアに玩景するもの、新今此の

榛原製

ことく追々庭園もろ〳〵ろ、自然と無交渉ニろ行く所ハ枯燥を感ずるもの欲迫すべきであろう。

○ことしの干支ハ未でい未ハ羊である。年賀この干支入就もあるの感ろ紙ちをも得ろハ。羊ハ姙んで紙ちをろ動物である。琴金社のごとく紙を扱ふ不ろハ縁因のある奴だ。御幣も撰けば羊の眼ハ縁起がよい。吾社の宮社も紙さく多く使ふ喰ひころ社成績がある。全体羊ハ自然庭園の動物で吉祥といふも北動物の名を藉りて慶儀を現ハすのである。日本ハ風土の関係で羊の群をなす光景を見ることが少ろへが此の

動物の群居生活をすることで孤立を表わす役
等の互いのまんあうて密集する、そして動く時も
一齊のまん会ようと動くから、宛かも波濤のう
拡るのを見るが如き壮かがある。支那で海洋をこ
んに擬し、西偏に羊を配してみるのハ
合理的の形容字である。洋々たる海の風景
八人の氣字を大に[illegible]洋々たる氣分ハ
もの也、別して新年ハ北氣分が欲しい。ねこ
だハらず暢んびりして心地が北氣分で度量の
快闊な[illegible]年が成[illegible]春
[illegible]氣分で新年を迎へたい。何ひもかんで
もせ、こまごまと窮屈つくめの今の世相も困り

もの也。お互いに一国となり
ようとの洋々たる心境ひゆきといふ不景氣を
どうふるも心柄であつて、不可抗力のものでハない。
自己の心柄で不景氣を招致する傾向が少なく
ない。福も三年経てば幸となろう。窮まんハ通ず
ハ物の数である。どんな清学なる不景氣で
も蔓延して行解の出来ぬことハ無い。要ハ氣
魄にあるのだ、不景氣に負ける者ハ
化するのハ不景氣に負けるからだ。屈托ハ徒に
不景氣を助長することとなる。北の吉祥の鼠
もしも幸ならしめるハの共責任人間にある
のだ。どうあつても年の改まると共に氣分を

七政の洋々たる氣分で萬物生成発育する。不羅
世氣を退治する先づ心境を開拓せねばならぬ。
膳病屋托、自卑るんどいふ（註本中東京仕
事人の胸間を起す悪徳ハ皆な不羅氣から生
ずる心理である、こんを一掃すんべ不羅氣ろん
のたのびある。兎角羊を戻るか、羊もど従順の動
物のうち。或る四土と化たん神を祭けるうち必ず
羊を犠牲とする。羊ハ従順であるとも而うも氣
の毒なこと此其代り神の愛を受けもする。
善ろも此の愛すんべき動物と信ずべきと感
する。お互ひの奉仕する国家ハ丁度今社
の為めに、従順ひろけんべ秩序が破れる時犠牲
（社是と称ても従順で高度劇）

の精神が無んば軽蔑ハ。この二つのものハいと
り従業員のみを言ふことと誤解されたるため。
苟も今社に在ること丈の心位の為に拘ずし
服膺せねばならぬ、但し本年の干支と感じ新
し所徳を陳べて新年の祝とする（の為の制
二二人の為めに精神を一月十日）此ハ毎校を
要す

○此の新年の年首めつる時七と祝乾くべき
や、毎年恵比寿と称するんど雲光の後
ろんばと言ふ者の氣もさして躊躇せしが為
しハ日といふ日は恵比寿に来る、ちらと右とする
抱ロ屋さハ七八年一法表（表）きしが、その改革

を見人とを共なる北陸に赴く。入口も舊藩の高き所に つき自動車も乗り込む便なるも七と二階建りなるしが今の三階建と違ひ共の旅館も清潔なる方なるまつもとし 田舎の井上閣あり此に去つて左らず隣地の松平侯別邸 邸を主人 まりこそ 内藤久寛氏に伴家後ろと友人とその他 達の外金子馬流が共友人の病の故を以つて滞在しあるの外、別着の日い深沢を度人 達の方を訪ふも零英の跡を見ず好晴を無うして俗の ことく話し明日い業祝に祝人でよの旅業を終すること 生田七郎の来り花山を指めて旅味深き時を移し 金子馬流と共に早大の業後

就て測候に時を移し 東京に出発の日なる雲 りつきと雨に来るし 此地も九月い雪の代り 雨ふりも鬼角数果に便ることなるしが十の夜快 晴を得ずと西風つよく殊に前夜隣室旅の巨 宝と多くの客人 宵 解いに乗ふも優んとなるしが 達の手紙 を受け行かんが 桜国と行き 駅り右を出で、花い六合 頃也、西彦火の為めに あちらこちらに出産が崩れ て人馬共に困難なる不安 殊に国内の老樟い 直道が役の行者 を著す時行者と擬して樟 る屋敷もあるに、一枝の折れるい者に惜しむべし

池の後方に常盤池と称する池あり、別荘の西風致や国の指標を斜めに見る位置にあり、池の西に別荘の四五軒あるのを見れば、北の限界も遠く迄拡がる。別荘の西に「茶屋」が出来たもの、附近に近き東屋山茶の「重箱」が出来たもの、又自動車を設け、重箱の外に酒肴の料理家あり、まづ東屋の本店なるべし、料理こゝにまづ出し、割烹論、なまぐさの蒲焼、鰻の白焼、上等也、白金の山茶の「重箱」は美味時から行つたこともあるべうれど、却つて此地にて廿分を訪ふ時得らるゝ喜とすべし、北の池に

榛原製

此日来る途中、附近の崖上に新築の別荘あり、まだ出来ざる間なれども、陸合不便の下に見えるまでも建築の盛んなることよ、今後を往歩すれば来の宮を訪ふ、こゝ（白金）も近頃大改築さんとて主流なるべしとのこと、境内に三浦観樹将軍の遺詩を大美の木柱の筆し写真紀念碑建設さんとす、流れに臨む春年新らしき

一月十日午後記

ものを多く見る。

邑遠と称し新居の舊廬の清景を訪ひ、ハ、丸の伊豆山の形模庭の手を入り初めたれ

と雪、自金の丸を望き情しいことゞ。

海を隔てる紀念物を丸山にて見くべきである

又伊豆山と取去られたのは寧ろ此地にある霞木の不完と云ひ放がらるゝ為。且俗謡の花々が他の圓割向上今で猶のこれ双柿舎と共に保存せらるゝことも出来たのは実に千国迄らずの優で幸んだと云ふから、其位置今ひも賞ひ得たのである。赤摸屋も文豪の記念物として旅館ちらす後用ちれ、ちる地點と建て。粗略ともあれ幾子で、西迄迄に数を書いてくれと頼んでおるとかで、最も好く就ても余る赤摸が ちうた。

此ゝ霞木旅館が別館と云ふる落ち飯地を心のこれ臨江荘と云ふ。金子馬次天爵が

榛原製

那てあるので訪ひて其の道筋を思ひ出迄迄が多の差国をして設計したのは迄で満河渕新であるのと云ふが、平屋建で氣分を入つた臨江荘と云ふ若も西迄の命名したのだが、昔しこの家を臨江と称する名の傾が住人に入れと云ふかも、美人と因人とのどちらだ。迄迄の舊廣い家人と北荘と隣る地形をあるのを、熱川と云ふ小河を流ふてゐた。臨江と云ふのは熱川とさすがあるとあるが西迄の舊廣とを其つゝ臨江荘であつた。美を霞木が手を入れたとゝ、今家迄とたのとお待

つと引き立つ比びあくうに悪しいことびあつと
○夕谷ハ茶の時墨田川べつりの橋場に住し比こ
ともあるなり、山谷の白製原重ハ者に入つ比こと
が無い。その次ハ飯う製を好まるこうつ比こうら
びあとうる。北の重者の家ハ墨田川が湾曲して
山谷の堀となる。用ゑあつ比こと丈ハ目瞭しと加つ
てゐる。下谷及数の側まハ堀に面して舟宿が四
式軒が並んでゐる。当時芝原と通ふ嬢客ハ行
くも帰へるも、北の重者に日立つ比びあらう
し出前もし比びあるから陸分繁れ茶屋し比課
びあるのも今ハ全く形場が変つ比。製る)び物し
北家の焼方を可とするまで無んハ足を運ハ

榛原製

いやうなう比ばかり、要所に支店を出さ様ハるこ
ともあり、終に丸海の支店を設くるまつ
比。丸海の支店ひも原料ハ本店より送り割
賃の法ハ重者に重者の困難に振つてゐる。魚
の洗ひる度を後へぎゾルく巻いて添くるな
ども傍来に往ハ一端びあらう、製の焼方ハ較々
かとハいふ比がなし比が淡泊びある所に特長がある。
鰹の本場ハ白焼をワサビ醤油びあハせるのもよろ
しい。陸分しつこひ料理ハ多い、鯛を当時喜
ハん比のハ性質本位の客の或る鉄之を充すに必要
とする比のびあらう。いつぞや重者し所花の古本
が出る市法を出比ことがある。海苔本莫まも低六

藤本など皆蕪村に関するものばかりの本で、今では僕の
宝になつて居るのが多かつたが、此家の盛んな時代に集め
られたものであらう。現今でもある支店は所謂連れこみ
不善宿ともいふべき○○旅籠だが、人を宿泊せしめないといふ
のでもなければ附近と二軒許り旅館もあるから
それと連絡があるのやうに思はれる。此店では一
食五十銭で台物を注文すべく運ぶ段取を立て
一日三食をとれば一円十銭迄割引と宣伝して
ゐる。これは旅舎などは宿せず、部屋借りもして
ゐるものらしいのであるが、論語である。本日迄は團体客が
集合するときに會合して祈禱すると満すやうな連中
るは論語である祈禱らしくもあるかも優れた宿物

である。自分は試みにも倭侍の婢に五十人百人の注文
に應ずる設備があるかと訊ねたら、此今出来ると
云ふのに宣伝さへ届けば、お客は行かれさうに思
はれる。

○高嶋北海の「写山要訣」を見たのは二十年程も前
であつたらうか、世界の種々の瀧や山水が描
かれたのが、当時としては面白しろく感じた。それから一
晩年演古本屋から一冊の大きい本を手に入れ
た。それは北海の東華山に二百枚近くもの内外の
山水図が収めてあるので欧州山水奇勝と云ふ
著書の図も、多くこれから出てゐるやうに思はれ
た。それであることから北海の経歴が知りたくなつた。然

「山天奇勝」を詠ずるとて、北海道の書いた
経歴が初めて出るのだ、其の一端を知つた年譜の
様も唯恵像
するのみで
と一九九四年
る様子が無
つたが熱海の
交会で東京
朝日を見ると
北人の訃が伝
へられ、富士山
が出て、

## 高島北海畫伯

文展初期の審査員高島北海畫伯は客年十一月下旬風邪が原因で府下北品川御殿山三一六金恩頂介氏邸に臥床療養中であつたが高齢のため老衰病を誘発し、十日午後十一時三十七分逝去した、行年八十二

十四日午前十一時から十二時まで青山斎場において神式により告別式を執行する

北海畫伯は本名を得三といひ毛利藩の侍醫の家に生れた、少年時代には桂公爵、乃木大將ともに藩校明倫館に學んだこともある、畫伯が畫筆をもつて世にたつたのは中年からでその前は當時の農商務省山林局の屠であつた、七年間全國の山野を踏破して「日本植物帖」を完成し明治大帝より三百圓の

### 御下賜金を

授かつたことがある、その後フランスに留學してナンシーの山林大學を卒業歸朝するなど當時の畫伯は一個の山林技師として生がいを全うする考へであつたとのことであるがその頃始めて「北海」の推敲で日本美術協會に山水畫を出品し、非常な賞賛を博した、それが機縁となつて北海畫伯の畫道精進がはじまつた、その後殺人生活を辭して郷里長府に歸臥すること五年、武井守正、井上馨氏の勸説もあつて再び上京、明治三十七年ロッキー山寫生のために渡米しセントルイス博覽會では日本畫の席上揮ごうをなした、支那山水寫生旅行に出では蜀の棧道から鎮屋山を究めた、四十二年文展開設と同時に選ばれて審査員となり大正十二年まで歴任した、その後は郷里にあつて「長門峡」「青海島」等の名勝に對して畫筆をふるつた、描鳥に非常に忠實で

### 一木一草と

いへども忽にしないといふ風があつて、第九回文展に出品した「富士の裾野」では當時の植物園長中村博士と論爭してこれを默せしめたことは有名なふ話だ、日光裏見の滝を描きかけて、ふと散歩姿で家人にも告げずに日光まで出かけて滝の落水の方向をみてくるといふ風であつた、朝鮮の金剛山を日本人として最初に踏破し、その奇岩怪石を紹介したのも高島畫伯である「寫山製詩」「歐洲山水奇勝」「日本山水奇勝」「支那百景」「花彫箋」等の著書がある

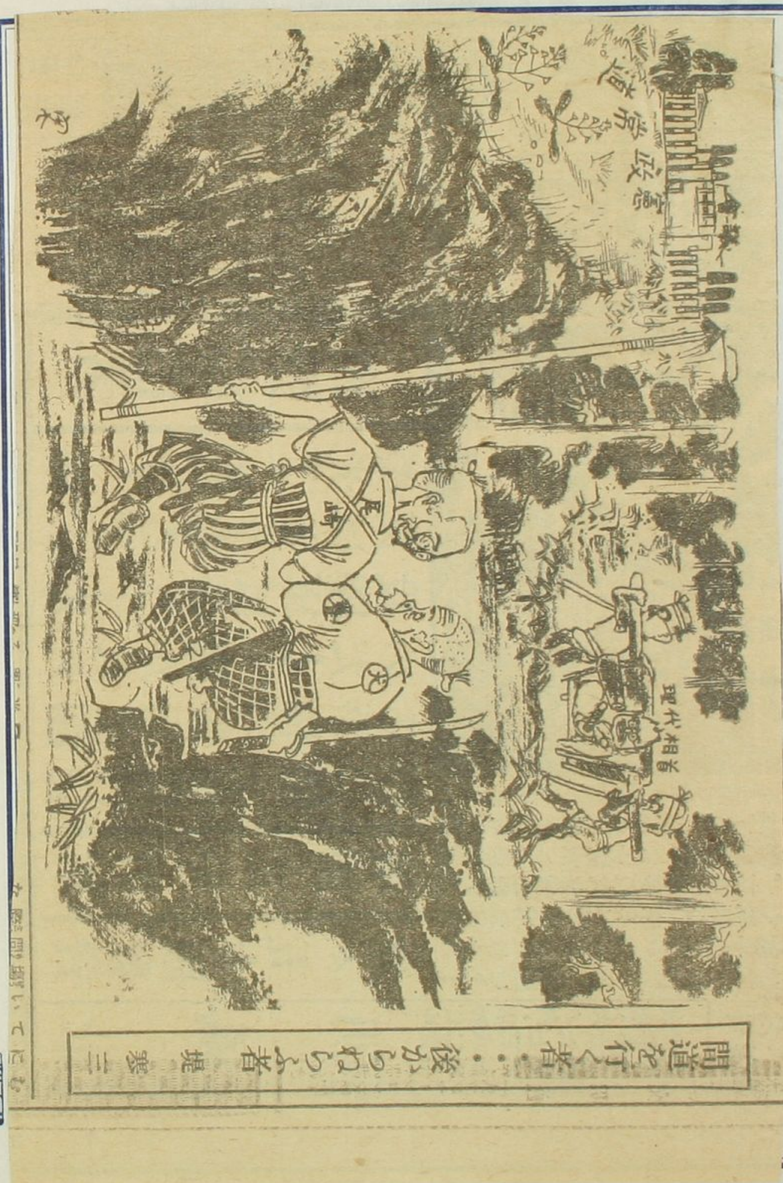
榛原製

おとし、八十二年まで不生のやうなお
振舞を山天面家を失ひ此の遺蹟である
昭和六年一月十二日の記
○旅行は時々寒いので
つてゐると、道路の
九、道路の庭の雪柱
で端で雪柱が活動
まゐ雪が無いと云ふ
を出して投げると
美人が雪柱といふ
ることが情婦の自
と我を出して
絵はがきを
絵紙
絵はがきを

と称せられたかまきりを描き、何すん
かまきりの餅を捕えようとして死をやうす
国中の印象を残したのが俗として、吾と称が
ある。
やがて四年となり例の霊宝寺なる赤穀となる寺の
鐘となる、その八年、大串しろうもタレが法泊
ろうとなる会ろう紫雲を二串まで平げるる道
道云々熱海の魚釣は道こまづく北の穀の
口こ道ふとあるし、その頃なる痩りの串が多く
雑書不から忠ひつき庭中の魚載なる の紀
料となるすると自ら多くの串を取中も魚載の
用を、輝しこまる魚附着する船ハ

榛原製

多くこと祇料となる利くそうである。
道逸が北陸雪で絶対こ抜んひ庭をそうし蒼吾
美こ自尼の聊本を吹込ることのあるハ何故かも
湖ゐて見ると、見ハ地雲の影響であると云ふ、
そもそも縦横こ巨費を要し利庭痩脱ひ弗し
重ひもろく庭することろとろろと白状す、一
時間許の吹込こ対し猶を雲間のしくの謎金
が得られると見くなり
抗次道逸の語る希隣の古哲の毎の森林を始る
き四八つて侍道をしとしよ
主 なる絡人がおるくしと。道逸の二字ハ北の故
の道逸ハことしの干支が自分の生年と帝るとふの




と羊の買物や玩具を多く集めてガラス棚に飾りて
おくに羊を渡すこと
ぬぎたるこころくのぐ アルバムに貼り込んであつた
自分の写真と 表の一年生入れ毎々くゝる紙を
貴すこと 表の一年生貴す紙の帰る大量であら
う 斯く申す拙者の金社も紙を始め人名紙多
く紙を 啥ひこるもの 成績があがるのだと云ふも
一八元一九
迚迚 零哭の時のことも稀り茶の間の屋根が
金と見て元の寝ぬもこゝに移し書机の二冊の
横に並べたのも、ぬぎと横み重なれが、その中央もも
く皆 振り落さんと 母表の枕頭の仏壇から皆

横原製

あが落ちて数個ばかり。上下動が到しかつたのと、池中の大石が飛出し、玄関のつくばいが上げられ、庭中の[illegible]の大石の燈籠塔は砕けて三層ばかり投げ、屋根瓦は多く角のそが崩れ、倒の塔婆形の書屋は紙張の[illegible]所が皆投げられ、壁の方々剥げたから市会議員紙を張つて地震の問答会はしてゐるとか話した処が多く八修禅を往せるあたの日子、雷鳴の響はまだ鳴り[illegible]ます。日こつこつ。

○自分の可愛銀座(百)であるが、浅草なエロの享楽事情を逆を大んにことが無い。銀座の横丁なる巣鴨の花柳のバアまいまん〳〵特徴もあるそうだが、男女が立ちまに揺ぶし、一杯ウエスキーを煽るが煽らるまゝに、日本十面の男名深のごとく、ウエートレスが慣れ〳〵しく話しかけて躰を擦りつけるのとなり、卓の下なる男女のお御を交へなり、寒さまんへ抱擁しなり接吻しなり、五ひまロからロへ酒を移して飲んだり、飲合ひを女からせられつなり、連れ立つて何んとなくあぐりこんだり、或いはカフエーなどなくてある秘密の家なる寝ごんなりする。そんなる簡単な享楽物なる江戸の奢の家時代に淫魔の最も盛しかつた時代でも恐らくそんなる簡単なる享楽を満足し得る所はなかつたであらう。女郎屋なども行会はなくて、言入る暇間から前借のことときことの出来るこまん無つたと思ふ。北喜楽物を立入まる

まん行する年輩の人がある亦種々の階級の人がある。西の氣の多い者の多いことは勿論である。が、強ちそんなばかりでもない。チャンと家庭をもつてゐるひもこゝの夫となる。毎々のある時分一たびこゝに入らぬ氣の淋しさもある。勿論必らずしもすぐ「びがまを買ふ」為に来る。唯だ家に女、戯れるのを無とするものもある。斯る簡易の享楽場が出来た。藝場娘の芸業も追々成り立ちかゝる、現在藝者が輕業カフエのウエートレス態で現はれたものが敢てかるく追々益すます多くなるであらう、北等へ客を操縦するのきつ技術をもつてゐる。善の道のウエトレスはいくら

樣原製

客もあつても、客を掌中にまるめこんで、觀衆するの技術をもつて居る。「善道」をかけてゐる彼等はまるでA、B、Cを知る迄まで、見ぬかるゝ、流車してゐると馬脚をあらはす、彼等の座掛は第一番一線、びく氣が生まれる、どこを行くと義妓の腕の流れと腕がさくてゐるから、技略がある氣輕がある客の胸腹を透視して客易る馬脚を露はさない。直ちに許すがごとくにあつて、実はそうでもないのつたりして、なるべく自分の手腕を安まる、実はそこに興味もあるもの、カフエーで義妓出身のウエトレスが悩を利かせるのは無理もない。こんな待合遊びを

どをしたことから云ハせると、下司ばつ風とお祝しさうさ
ないやうであるが北の新式の嫁女と云ハすれバ、コシナ
簡単で安直で便利の出来て来ることがと
しきあるかい。場末と迄入るとなきさう二三人の女が手
ある、初回田から貳年もの交りのあることゝて お解
けて、膳をさう会ハせ代りすがつて、陽る所かゝへ
そして五十銭銀貨の一つか二つを銀ゝ出ることき
授けんべんび酒おの代とそう云く八北の新式の
やり方で長もあるやうに見角人間の或る年齢
まハ島妻と満足か生来ず、道草を橋まぬ氣
が酒まぬ時代があるかゝいつの世ども見を湯
屋ゝ出せるゝ人ゝ見、美れ新方のうが出る芸比、今

榛原製

の世界の一端とも北の情景面を物まる（一月十三日）
○熱海内義栗城の別荘を銭柳湾の詩帖
を拝く詩こ云く

敷樹無楊霧雪後　梅春江雨歌
千山如画　淮家艇子去橋外　軽艙
揺々美　莫秋　柳湾八十吟
是れ新湾竹枝と思ハる、予甚に北詩を愛
す、

○熱海と迄　寒さ六日目こゝ北京と決し丈楽海を
しものゝ所く、此夜来れと云ハ西巷久寿が話
ひまり是れ一面の海生ときと紛めるのゝ急い
ものくるるとの男もるく、東京の寒さ紛も思ひや

ゝるので出発を延ばすことにした。内森と久し振り長時間話をした。種々の話を交へた。流が一夜ひやきで、珍客を招待した。午時まで重箱に生うに一杯四三四杯頂いて、不漁を試みた。時々往来もするが、北海のことく陰淡しとことは無へた。温泉場に必要である。

内森の別荘（[illegible]）の居住するところ、内森の別荘（[illegible]）が自分の[illegible]上らい無味でこんか無んば四五日間の温泉場と為す。お基お所が無い、一週間の[illegible]を延ばすことに決した。

[illegible]の全く友人の在るお蔭である。

榛原製

精京製

以下全て
白紙